

《書 評》

Juliet B. Schor, *The Overworked American:
The Unexpected Decline of Leisure,*
Basic Books, 1991

島

弘

目 次

- I 働き過ぎのアメリカ人
- II 時間の圧縮：仕事の超過の月
- III 「苦しい労働の生活」資本主義と労働時間
- IV 家庭における超過労働
- V 労働と支出の潜行性の循環
- VI りすの籠から脱出する
- VII 紹介を終わるに当たって

I 働き過ぎのアメリカ人

日本における「過労死」の問題が世界的に問題となり、karoushi が英語となってきている現在において、アメリカにおいて労働時間が長くなっているという問題を提起している書物が現れた。著者は Harvard University の若き女性の経済学者であるが、次のように指摘する。「数年前、私は私の行動に疑問を感じた。時間に対する現代的なアメリカ人の態度を持たなかった夫の影響が大変重要である。彼はアメリカ人の『時間の文化』についての多くが人類にとって有害であるということを見るのに私を助けた。……我々の多くは休憩し、くつろぎ、そしてより少なく働く事を必要にしている」(p. XV) と指摘している。そして、『働き過ぎのアメリカ人』を私に書かせた知的関心は、同僚と共に私が過去十年間に発展させた労働市場の新しい観点にその起点を持っている。標準的な性生活との対比において、新しい観点は労働者と彼らの雇用主との間の不均衡を強調する。基本的な不均衡は慢性的仕事の不足の中に存在してお

り、それは雇用主との不利な関係に労働者を置いている。(p. XV) そして彼女は、「私はレジャーの時間を増加させるのではなく、資本主義は人間の努力の巨大な拡大を意味するという事を発見した。人々はより長くそしてよりきつく働き始めた。この新しい観点から、私は安定したそして時間の増加している戦後の合衆国の経験を再解釈した。この書物はその経験を理解しようとする試みである。」(p. XVI) 彼女はこのようにこの書物の目的を示した後にその分析に入る。

まず、本書の章別編成を見てみよう。

第1章 働き過ぎのアメリカ人

第2章 時間の圧縮：仕事の超過の月

第3章 「苦しい労働生活」資本主義と労働時間

第4章 家庭における超過労働

第5章 労働と支出の潜行性の循環

第6章 りすの籠から脱出する

補 論A 戦後1948-1968年における安定

B Michigan と Maryland 大学の推計の比較の結果

C 市場の時間を推計する方法

D 家事労働の時間の推計

まず第1章の「働き過ぎのアメリカ人」であるが、彼女は初めに「最近の二十年間にアメリカ人がその仕事に費やす時間の量は、着実に上昇している。各年における変化は、約9時間あるいは一日の追加よりも少し大きい量である。ある一定の年において、このような小さな増加分は僅かである。しかし、二十年間に集積された増加は相当量である」(p. 1) と指摘をしている。そして、「労働時間の上昇は予測されていなかった。百年近くの間、労働時間は減少しつつあった。この減少が1940年代後半に突然終わったときに、労働時間は新しい時代を画した。しかしその変化はやっと注目された。驚くべき事であるが、また同じように殆ど認識されていない事はそれは西ヨーロッパからの逸脱である。一世紀近く協調して発展してきた後に、合衆国はレジャーを減少する軌道に変更したが、他方ではヨーロッパにおいては労働は少なくなりつつある。四十年後にはその差は大きくなる。合衆国の従業員は西ドイツやフランスと対照すると、常時 320 時間より長く労働している。——それは二ヶ月以上と同じであ

る。」(pp. 1-2) 彼女によれば、戦後合衆国の労働者の生産性は二倍になっている。それはアメリカの労働者が1948年の標準生活を毎日4時間の労働が、あるいは隔年の労働で毎年支払を受ける事が出来るものとしている。しかし、彼女によれば、この労働の生産性の向上は1948年の最初の20年の間に年率3パーセントの成長をしていながら、この生産性の上昇は労働時間の減少には回されなかった、その結果、「1990年に、平均のアメリカ人は1948年に彼あるいは彼女が所有し消費した二倍以上を所有し消費しているが、しがしまった自由時間をより少なくなっている。」(p. 2) どうしてこのような事が起こったのか？それは国際的な比較によれば、アメリカ人は何処の国よりも多くの時間をショッピングに使用し、また稼いだ貨幣のより多くの部分を消費に当てている。その結果、アメリカ人の標準生活は人類史上最高の物質的豊かさの水準にある。

しかしながら、それは「社会に慎重な選択の為の法廷はない。労働時間の増大は公衆の討論の結果として発生したのではない。政府、学界、あるいは市民組織等からも殆ど注目されていない。ほとんどの部分において、その問題はその議事の予定、選択も無し、そして隠れた交換も無い。それはいつもそうでは無かった。1791年の初め、フィラデフィアの土工が十時間労働日のためにストライキに入ったときに、労働の時間について公衆はよく知っていた。十九世紀全体、そして二十世紀に入っても、労働時間の短縮は国民の最も印象深い社会問題の一つである。雇用者と労働者は労働日の長さを巡って闘い、社会活動家は講義を行い、学者は論文を書き、裁判所は判決を下し、そして政府は労働の時間を統制した。不況を通じて時間は主たる社会の関心事であった。今日これらの論争と対立はもはや忘れられている。1930年代以来、労働とレジャーの間の選択は、全然、少なくとも意識的な意味では選択肢は無くなった。」(pp.3-4) しかしながら、「事実上1960年後半の初めに合衆国は労働時間を増加させる時代に入ったということを誰も認識していない。1980年代の終わりにおいてさえ、時間の問題を学界は回避した。」(p. 4) それ故に「労働時間は二十年間増加し続けていたにも拘らず、これは説明するべき第一の主要な研究課題でもなく、その傾向の認識さえもなかった。」(p.5)

これらの「専門家の正直さは、資本主義は数百年の間に労働時間を減少させたということによって、既に説明されているという彼らの仮定に基礎を置いている。市場のシステムの前に、大多数の人々は夜明けから日没まで、一年に三百六十五日働く」と教

えられてきた。今日我々は週四十時間労働、年休暇を祝福し、そして学校へ行くときと退職後を拡大した。この支配的な型にはまった知恵は、資本主義は世界的な初めてのレジャー社会の創造したという事である。」しかしながら、J. B. Schor はこの誤りは資本主義以前の、18世紀と19世紀のヨーロッパとアメリカを比較すれば分かるとしている。彼女は中世の経済は一年の中で十分なレジャーの機会を用意していたとかいっている。

このような説明の後に、彼女は「資本主義経済の基本的な刺激構造は長い労働時間へ傾くことを意味している。これらの刺激の結果、資本主義の発展は私の言う『長時間労働の仕事 (long hour job)』の成長へ導く。起こり得るレジャーの回復は労働組合や社会改良家がより短い労働時間への長い闘争を闘う結果として発生する。大恐慌と第二次世界大戦の終了の間の幾つかの時期には、その闘争が崩壊した。長い労働時間への不可避の圧力が再び貫かれたので、合衆国の労働者は世紀の終了時の現在レジャー時間の危機を創造するような新しい低下を経験している」(p. 7) と主張する。

そして長時間労働を問題にするときには、彼女は彼女ら自身の家庭で私的な仕事をしている婦人の問題を見のがす事が出来ないと主張する。「1920年代に始まり、そして1970年代まで続いた家事労働の研究は、フル・タイムの主婦が彼女の仕事に捧げる時間の総量は、五十年間——家事の技術が劇的に変化しているにもかかわらず——事実上変化無しに留まっている。」(p. 8) 彼女によれば、家庭に「産業化」が持ち込まれ、洗濯機などの家庭用電気器具が導入された。或いは既製品の衣服と半製品の食物が家庭で作られる食物に取って代わった。「しかしすべてのこれらの労働節約的革新と共に、労働は節約されなかった。そのかわりに、家事労働は利用できる時間全体に拡大した。清潔さの基準が上昇した。母としての仕事の標準がより厳しいものに増大した。調理や焼き物がより複雑なものになった。」(p. 8)

そして、彼女は我々の生活は我々よりも前に生活してきた人たちよりもより良いと信じるように教育されてきたとし、「近代経済学のイデオロギーは物質的進歩は満足と幸福を高めることをもたらすと提案してきた。しかし我々自身の幸福についての我々の信頼の多くは、我々の生活がより初期の世代あるいは他の文化の生活よりもより容易であるという仮定からもたらされる。私は我々は中世のヨーロッパの農民よりも少なく働くが、しかしながら彼らがあつたよりも豊かであるという観念に既に論争を挑んだ。文化人類学者のその現地の調査はこの伝統的な知恵に他の観点を与えてくれ

る。」(p. 10) そして彼女は原始人の生活からはじめて中世の農民の生活を分析して、「我々は繁栄の価格を支払っている。資本主義は劇的に標準生活を高める事を買ったが、しかしより以上に労働生活を要求する犠牲においてである。」(p. 10)

その結果としてのストレスの増大が社会問題となってきた。「ストレスに関連した病気が、特に婦人の間で激増しているし、そして仕事が主要な要因である。ストレスに関連した労働者の補償要求が1980年代の前半の時期に三倍になっている。他の証拠はまた、仕事についての被用者の要求が増加している。現存する事の発見の最近の検討によれば、アメリカ人は文字通り死ぬまで働いている。——仕事は心臓障害、高血圧、胃の障害、憂鬱、疲労、そして各種の病気に貢献している。」(p. 10) また「睡眠は近代生活の他の障害となってきた。睡眠の調査者によれば、研究はアメリカ人の間の『睡眠不足』を指摘している。すなわち、アメリカ人の大部分は彼らが最適の健康と業務遂行のために睡眠するべきものよりも、現在夜に60から90分少ないのである。」(p. 11) 更に、「仕事と家族の間の手品のような行動は他の問題分野である。人口の半分は現在彼らは彼らの家族の為に殆ど時間を持っていない。その問題は特に婦人に激烈である。」(p. 11) それに加えて「経済学者 Sylvia Hewlett によれば、『子供の無視が我々の社会の風土病となってきた。』。主要な問題は『子供が彼らの両親が働きに行っている間に彼ら自身を自活するために、だんだん一人で放置される』」(p. 12)

かくて Schor は第1章の結論として次のように述べる。「過去40年は警告をもたらした。それらは我々にレジャーの時間や生活のより穏やかな方法において何ももたらされなかった。このシステムの傾向は強く現状に向かっている。しかし時間貧乏は社会的な構造を無理して創り出した。その継続的な成長は環境のバランスを脅かし、そして両性の平等は新しいネットワークの型を要求する。これらの障害にも拘らず、私は望みを持っている。仕事と消費の循環において我々が如何に心を砕くかを理解する事によって、恐らく仕事とレジャーの間の合理的なバランスを取り返す事が出来るであろう。」(p. 14)

Ⅱ 時間の圧縮：仕事の超過の月

「時間の圧縮が大きなニュースになってきた。1990年の夏に、Jane Pauley のテレビ

・ショウ(『真実の生活』)の初日のエピソードは、午前二時まで事務所に子供を引き込んで残る事をコンピュータが要求している独身の父親に焦点を当てた。」「時間の不足はまた女性用と事業用の雑誌の主要な記事となった。この問題は、地方の新聞におけると同様に、*New York Times*, *Wall Street Journal* そして *USA Today* のような主要新聞においても取り上げられた。*Time* という雑誌は、『アメリカは時間を使い尽くす』という事実について巻頭記事にした。時間管理についてのハウツー物が激増した。」「時間の圧縮は若い都市の専門家を浮き上がらせた。これらの高度な仕事の達成者は一週に60, 80, 100時間さえ要求される仕事を持っている。」(pp. 17-8)そして「従業員の献身、創意性、そしてフレキシビリティを強調する競争の第一線の会社においては、時間に関する要求は多くの場合最大である」(p. 19)と主張される。

「この休憩の短縮、経済的競争と革新的事業経営との結合は、本質的に時間の問題を浮かび上がらせた。上級経営者のある回答者は週間の労働時間が1980年代に上昇し、そして休暇が減少した事を発見している。他の調査は同じような結果を示している。」(p. 19)そして彼女によれば、このような上層の労働者の過剰労働は一種の風土病になってきている。

「最もよく見られるグループは婦人である。彼女らは二重の重みを背負っている。——すなわち家庭と子供の負担をとまなう伝統的な責任と給料を稼ぐという増大する責任である。成人の婦人の三分の二近くが現在雇われているし、仕事についていての母に相当する部分と共に、多くのアメリカ人は働きすぎであることを自覚していても不思議ではない。多くの働いている母親たちは二つのフル・タイムの仕事を立派に果たしていく終身の運動の生活を生きている。彼女らは一日の初めに非常に早い時間に起き、短い時間の洗濯、掃除、そして家事をしている。そこで彼女らは子供に服を着せ、食事をさせ、そして彼らを学校へ送り出す。その後彼女らは彼女らの仕事に出かける。フル・タイムで雇われている婦人の四分の三は次の八時間半は職場で過ごす事になる。」(p. 20)

しかも、「人は婦人の労働時間が上昇するに連れて夫は仕事に費やす時間は減少すると考えるであろう。しかし、正反対の事が起こっている。働いている男子はまたより長い労働時間になっている」(p. 21)のである。

そして、「労働時間が広がる背景は、いろいろな傾向が集合したものである。これらは支払を受ける仕事を持つ人々の数の増加、過労働時間と各年の働く週の増加、そ

して支払われる時間、すなわち病気の欠勤と仕事からの欠勤の減少というものを含んでいる。」(p. 24)

そして「女性の雇用は当然に広く注目を受けている。すなわち、それは確かに最も重要なことが進行中である。」「国民の若い人々がより多くが働いているばかりでなく、彼らはより長い時間働いている。」(pp. 25-6)

結局「私の推計——最近の20年間に渡る労働時間の初めての総合的計算——はより多くの人々が働いているだけでなく、彼らはより多く働いているという事を確認している」(p. 28) という事になる。ではどうして労働時間がこのように延長しているのであろうか。二つの要素を Schor はあげている。すなわち、第一の要素は二つの職業を持つ事である。彼女によれば、700万人以上が二つ無いし三つの職業を持っている。第二の要素は、アメリカ人はより多くの超過労働をしていると言う事である。それは景気の後退と共に増加しているのである。

「1980年代における最も注目される発展の一つは、支払われる時間が事実上縮小した事である。ヨーロッパの労働者は休暇の時間を獲得している。——最低の割当は、多くの国において4から5週間の間に現在ある。——しかし、アメリカ人はそれを失いつつある。最近の10年間に、合衆国の労働者は支払われる時間——年当たりの休暇時間、休み、有給の病気欠勤、そしてその他の有給休暇の三日と半日のように。この減少は支払われる休暇時間で見ると30年間の進歩をひっくり返す程縮小している。」(p. 32) しかも、「仕事へ行き帰りの通勤時間は1975年以降増加し始めており、それは年に約三日(23時間)の全体の増加である。支払休暇時間における変化と一緒にすると、私は11時間から20時間の労働時間——あるいは一日半から二日半の——追加的な上昇を見いだす。」(p. 33)

「人々に支払われている労働——『通常の』仕事に費やす時間——に加えて、仕事の殆ど同じ量が支払われないですべての年に行われている。——家事労働、育児、そして他の『家庭の仕事』のほとんどである。レジャー時間における変化の全物語を得るためには、われわれはこの労働の推計もまた必要とする。」(p. 33)

しかも「その時間の圧縮が問題でないアメリカ人の一つのグループが少なくともも存在する。それらは十分な仕事を得る事の出来ない、あるいは全然得る事の出来ない数百万の人々である。彼らは豊富な『レジャー』を持っているが、しかしそれを心から楽しむ事は出来ない。我々の現在の状況の皮肉の一つは大多数の人々の過剰労働は少

数の人々の強制された怠惰の増大を伴っている事である。彼らがしたいと思っているだけの時間を働く事の出来ない労働力群の比率は、最近二十年間に二倍以上になる。我々の経済制度は、或人々には『過小生産』のレジャーである事は全く確かであるが、それは他の人々にとってはレジャーの『過剰生産』である。」(p. 39)

「強制された怠惰は一時解雇された人々だけに限定されない。失業もまた増大している。」(p. 39)

結局、「失業が1970年代に上昇したので、幾人かの労働経済学者と教育者は、労働時間の短縮を主張し始めた。労働運動の長期的な伝統に戻って、彼らは週間の労働時間の削減が数百万の人々を仕事へ戻す事を主張した。しかし、彼らの明白な主張にも拘らず、この提案は全く重要な提案として受けとられなかった。失業問題が1980年代に悪化した時でさえ、ワーク・シェアリングは事実上無視され続けた。しかしもし『仕事を分散する事』が我々の経済システムの明白な不合理性への実際的で人間的な解決案であるならば、何故それは失敗するのか？私が次の章で論ずるように、週の労働時間の削減の見せかけの合理性は『より大きい』資本家の論理に屈服するために失敗する。雇用者は労働時間を長くする強力なインセンティブを持っている。そしてこれらのインセンティブは労働時間を増大し、そしてそれらを高く保つための手段となる。回想すれば、改革者は国民の仕事の欠乏と時間の欠乏の両方を解決するための資本主義それ自身の中の障害を掘り崩していたのである。」(pp. 40-41)

Ⅲ 「苦しい労働の生活」資本主義と労働時間

資本主義の永続的な神話の一つは、それは人間の苦勞を減少させることである。この神話は十九世紀における七十あるいは八十時間との相对比较によって典型的に弁護される。暗黙理に、——しかしあまり明確ではないが——その仮定は、八十標準時間が幾世紀に支配的であったと言う事である。比較は中世農民の暗い生活、夜明けから暗くなるまで苦勞する生活と呼び戻す。我々は、太陽が登る前から、夜遅くまでローソクの光で仕事をしている、寒いじめじめした屋根裏での職人見習いを想像することを求められる。」(pp. 43-4)

しかし、Schor によれば、資本主義の以前においては、現在ほど長時間働いていなかったし、レジャーを豊富に持っていた。そして、中世の労働として次のような説明が

を行う。「中世の時期における典型的な労働日を考えてみよう。それは夜明けから薄暮まで（夏期には十六時間で冬には八時間）に渡るが、しかし Pilkington 司教が述べているように、仕事は断続的である。——朝食、昼食、習慣的な午後の仮眠、そして晩食の休憩と言われる。時期と場所によっては、午前中と午後に短い休みがある。これらの休憩時間は労働者の伝統的な権利であり、彼らは取り入れの最盛期でさえもそれを取っていた。閑散な時期には、それは年間の大きな部分であるが、定まった労働時間への固執は通常ではなかった。オックスフォードの教授 James E. Thorold Rogers によれば、中世の労働日は八時間よりも長くなかった。十九世紀の末の八時間労働時間運動への労働者の参加は、『彼の四あるいは五世紀前の先祖が働いていたものへの復讐を単に望んだに過ぎない。』（pp. 45-6）

そして更に「労働の速度はまた近代の標準よりはるかに下であった。——部分的には中世社会の生活の一般的な速度がゆっくりしているからである。フランスの歴史家 Jacques LeGoff は前資本主義の労働時間を『生産性に関係ない農業のリズム、急ぐ事無し、正確さに関係無しによって支配されている時期であり、量的な努力の巨大な欲求無しで、それを望まない、そしてその能力もない、落ち着いたそして控えめの経済を想像させるものを創り出す社会の時期』であると説明した。」（p. 46）だからこの時代は時間が経済的価値を持っていない。

しかし、仕事の速度は文化的な理由のみによって遅かったのではない。「熱量の吸収の知識の基礎にだって、我々は、仕事は低いエネルギーの問題であると推定できる。金持ちを除いてすべての消費は早い速度あるいは継続的な労働のどちらを維持するにも不適当である。」（p. 46）

「資本主義の労働の型と前資本主義の労働のそれとの対照は、労働年に関して最も明確である。中世のカレンダーは休日で満たされていた。公式の——すなわち教会の——休日は、クリスマス、イースター、真夏の長い「休暇」を含むばかりでなく、成人の祝日や休息日を含んでいた。それらは酒を飲まない教会通いと祝宴、宴会、そしてお祭の両方に費やされた。公式の祝日に加えて、多くの場合、週にわたる村祭——より重要性の少ない出来事（支払祭や子供の祭、ぶどう酒祭）と同様に、重要な生活の出来事（花嫁祭や新築式）を飾る。すべて言われているように、中世英国における休日のレジャー時間は恐らく年の三分の一もあったであろう。そして英国は明らかに近隣の国よりも良く働いていた。フランスにおける旧体制は五十二の日曜日、九十の休

日、そして三十八の休暇が保証されていたと報告されている。スペインにおいては、旅行者は休日は一年に五ヶ月になったと明記している。」(pp. 46-7) 更に14世紀後半のイギリスにおいて賃金が異常に高騰した時には、農民達は一年に半分も働かなかったと指摘している。

「短い労働年は前資本主義社会の重要な特徴、すなわち消費と蓄積の文化を持たない特徴である。そこには貨幣を稼いだり、ため込む興味と機会を殆ど持たない。物質的な成功はそれが前提されているような過大な重要性をもって投資されなかった。そして消費は限定があった。——物を利用できなかったし自由に処分できる所得を持つ中流階層も無かったと言う両方の理由で。このような状況の下で、労働への強制が無かった事は理解できる。」(p. 47)

このように事実を説明した後に、彼女は「私がしようと思っている主張は、資本主義は従業員を長い時間働かす強い誘因を創造したという事である。初期の段階においては、これらの誘因は時間と共に変化しない固定した賃金の形を取っていた。二十世紀においては、この誘因は固定された年間給与の外観で再び表れた。それはホワイト・カラー労働者の長時間労働の主たる理由である事を証明した。他の誘因はまた、十九世紀の終わりに、例えば、雇用主の機械を継続的に動かしたいという要求、そして作業場の規律としての長時間労働の追加賃金の利益のような形で役割をはたした。後になって、追加給付の支払の特質が影響を持つようになった。これらの要素のそれぞれは、長時間労働に重要な役割をはたした。勿論、それに反対する圧力もあった。それはより短い労働時間への激しい百年間の闘争であった。しかし、この追求が第二次世界大戦後に終わったときに、労働時間の減少は事実上終わった。労働組合がこの闘争をあきらめてすぐに、アメリカの労働者の労働時間は増加し始めた」(p. 48) と説明する。

彼女は「資本主義は中世の社会を支配していたレジャーを着実に侵食した」としている。彼女によれば、資本家が労働者に「苛酷な」労働日を強制するために利用したのは、「公共の時計」であった。この頃から時計が「仕事の鐘」として労働時間の規制者になった。「仕事の鐘が導入されるや、それらはより苦しい対立の対象となった。それらは現実には機械的な時計で無かったので、鐘は手で鳴らされ、労働者、雇用者そして市の役人がそれらの統制で張り合った。労働者達は時計を黙らす為に反乱を起こし、歴史家 Jaques. LeGoff が「生地製作者の時計」と名付けたものと闘った。

市の役人は雇用主の利益のために反応した。罰金が仕事に遅れたり、あるいは早く帰ったりして鐘の強制に従わなかった労働者に課せられた。より苛酷な罰——死刑を含む——が反乱の合図として鐘を用いた人々に用意されていた。雇用主と国との同盟に直面して、労働者の抵抗は敗北した。そして彼らはより長い労働時間、仕事のより早い速度、時計の統制に忍従した。(p. 49)

このようなことはまず繊維産業における危機と共に現れたのであるが、それは資本主義と仕事についての二つの重要な点を示しているとして彼女は次のように指摘する。「第一に、雇用主は時間それ自身を労働を統制するのに用いた。中世のヨーロッパにおいては、時間の意識は漠然としていた。労働時間の単位は『一日』であった。それは太陽に縛られており、そして私が注意したように、大体である傾向にあった。近代的時間意識は、時計に慣れる事、時間の節約、そして時間の所有を含んでいるが、雇用主が彼らの従業員に対して用いる一つの重要な武器になった。」「第二の点は、労働時間は事業が生存し、繁栄するための能力に深く影響する決定的な経済的要素になったと言う事である。」(p. 50) その結果、第一に資本主義が成長するにつれて、労働時間は着実に延長されていった。「第二の変革は中世の人々が享受していた定期的な休日の殆どすべての喪失である。」(p. 51) そして「労働者のレジャーの漸増的な喪失は中世の経済に似ていない資本主義の中での構造的な強制から生まれている。」(p. 51) こうして「国内的ならびに国際的な市場の成長は労働者を習慣の世界から競争の現実に移し入れた。中世の荘園とは対照的に、資本主義事業は最大の利潤のために闘う。彼らはその基礎の上で生き、あるいは死ぬ。時間には費用が掛かるので、強く抵抗がある。或雇用主が彼の労働者からより多くの仕事を吸収するように管理するならば、他の雇用主はそれに従う事を強制される。雇用主の殆ど大部分がより長い労働時間を要求する事を出来る限りそれを標準として設定する。労働者は金銭的支配の為の生活のより大きな闘争の犠牲になる。(p. 52) それ故に「世界市場の成長とプロレタリアードの創造は労働時間の上昇の背景を形成する主たる社会的発展であった。労働市場の出現の特定の特徴はまた長時間の労働時間への圧力を増加させた。」(p. 53) そして「日賃金が固定されていたという事実は雇用主に労働時間を増加する純粋な誘因を与えた。すなわち、働く追加時間は無料であった。そして労働者は労働時間を増加させる圧力に抵抗する事は出来なかったが故に、労働時間は激しく増加した。——特にイギリスと合衆国の工場において。初期の工場における Marx

の有名な説明は、それらに付いて労働者にとっての無情な事実である。」(p. 54)「同じ様な戦略が合衆国でも用いられた、そしてそこでは工場の時間は十九世紀の第2四半期まで、一週七十五時間から九十時間の範囲であった。」(p. 55)

しかし、労働者の側でも黙ってそれに従っていた訳ではない。「勿論、労働者は彼らの時間を盗まれるのを消極的に受け入れていたのではない。抵抗は広がり、そして仕事の時間を示すのを失敗した労働者は自分自身の時間の部分を獲得するためにいろいろな形を取ったし、あるいは失われたレジャーを埋め合わせるためにストライキに入った。」(p. 55) 彼女はそれについて多くの例をあげて説明している。「しかしながら、十九世紀の後半までは、イギリスと合衆国の両方の工場の労働時間は少なくなるよりは増加していた。労働者が彼らの労働を売る市場における労働者の地位は彼らのレジャー時間を取り返すに十分なほど有利ではなかった。」(p. 55) さらにこの労働時間の延長は産業分野以外にも広がっている。すなわち、「労働時間を増加させようとする誘因は同じように経済他の分野にも作用する。召使いは固定された賃金で支払われる。農業の召使いと中流階級の家計における召使いを一緒にすれば十九世紀の後半におけるイギリスと合衆国の両方において労働者の重要な部分を構成する。召使いは部屋と食事、それに週毎、あるいは恐らく季節のどちらかによって、一定の支払がされる。もし労働の時間が増加しても、彼らは追加の支払を受けない。彼らの労働時間が特に厳しいものになっても驚くべき事ではない。」(p. 55) そしておなじような力が奴隷化されているアメリカ南部にも及んだと彼女は述べている。

Schorによると「すべての労働者が日賃金で支払われているのではない。衣服の縫製、あるいは機械の道具の切削のような個人の生産高が測定出来るところでは、『出来高』で支払う事が出来た。——それは達成された実際の仕事の基礎の上で、労働契約のこの形式は長時間労働時間への圧力はないように見える。理論的には、労働者は努力の程度を選択できるし、そして雇用主は行われた物のみに支払う事が出来る。そこには、長時間労働時間への誘因は無い。」(p. 56) 「出来高給は一部はその率が低く設定されているが故に長時間労働へ導く。これらの低率はいろいろな原因がある。一つの理由としては、そのシステムは婦人が圧倒的に多く、その支払は常に低いのである。第二の理由は、外注に参加する障壁が事実上無いと言う事である。資本は殆どいらなし、材料は資本家によって前もって「貸し出される」。多くの人々が含まれると共に、その貸し出しは容易に率を低める。最後にこれらの産業の構造は高度に競

争的であり、多くの場合、資本家には小さい利潤しかもたらさない。利潤はしばしば事業が不況の間に縮小され、そしてその代償に率がカットされる。」(p. 57) それは「貧乏と超過労働の悪質な下降螺旋階段」と彼女は指摘している。そして余分の生産物が市場にあふれ、それが賃金率を押し下げる。下がった賃金率が更に生産の増加に拍車をかける。「遂に、外注システムはイギリスと合衆国の両方においてかなり衰退した。出来高給制度は消滅しないで、工場に導入され、改革者 Frederick Winslow Taylor の『科学的管理法』の考え方によって二十世紀初期に拍車をかけられた。Taylor は、現実に行われた労働——それは出来高によって——を基礎にして厳密に支払うことによって、資本と労働の対立を排除しようとした。出来高賃金を「科学的に」設定し、そしてそのことによって彼らを対立から切り放す為に、科学的管理法は工場内における個々人の課業の速度、あるいは『標準時間』と呼ばれるものを決定するために時間動作研究を始めた。出来高賃率はこれらの標準の基礎の上に計算される。」(p. 58) しかしこれによっても労使の対立は防ぐ事が出来なかったと彼女は説明している。

「雇用主がより多くの労働を望んだときに、労働者はより多くの貨幣を望んだ。結局、時間(あるいはより少ない単位)による支払の原則は、労働契約の支配的な形になった。労働時間に賃金を結び付ける事は、雇用主の長時間労働への選好を、もはや余分の時間は自由ではなくて、それを排除するけれども、他の要素が長時間労働への雇用主の利益を永続させる。これらは十九世紀の後半に増加した機械化であり、労働現場での規律を増加させるために、二十世紀における長時間の利用と雇用主の地代のコンセプトであり、そして第二次世界戦争以来特別給与の構造によって創り出された偏見である。」(p. 59) すなわち、「百五十年の間、製造産業は増加する機械化の過程にあった。機械は単純なものから出発し、時間を経るに従ってより複雑で高価なものになった。二十世紀には、会社は高価な設備を気まぐれな量でつかっていた。資本が投資されると、その所有者はそれを可能な限り強く使用することを求める強い金銭的な誘因を持つ。」(p. 59) 「もし従業員が短い時間働こうとするならば、機械が遊んでしまう。——それは企業にとって高価な所有物であり、それを買うためにお金を借りたり、あるいはその注文を満たすためにより高い生産を必要とした。機械を高度に用いたいというこの動機は、労働者が時間あるいは出来高あるいは固定量によって支払われようが、長時間労働の重要な原因である。」(p. 60) 彼女によればこのことが

鉄鋼や鉄道等もっとも多く資本投資されている産業が長時間労働であることを説明する。

さらに資本家はその労働時間の中での作業規律の確立に力を注いだ。しかし「多くの雇用主は、成年の人々は工場の規律にあうように矯正できないと確信するにいたった。」(p. 61) そこで小学校で工場生産に必要な仕事の規律を労働者階級に慣れさせようとしたが、うまくいかなかった。結局「1914年に Henry Ford が来るべき十年間労働者の抵抗の形を変化させた詳細な方法を工夫した。」(p. 61) その第一はコンペヤー・ベルトの設置である。そしてそれに慣れさせるために新しい金銭的戦略すなわち一日五ドルを制度化した。Schor によれば、これは彼女のコンセプトにおける「雇用地代」である。「その最も単純な用語において、雇用地代は労働者にとって仕事の価値である。雇用地代は経済学者の用語である。所有者は、その彼が所有する『財産』を定まって供給するときに、地代を要求する事が出来る。土地, oil sheikes (oil shale 油母頁岩の誤りか? ……訳者)の所有者, スターの野球選手, そしてノーベル賞受賞者はすべて地代を獲得できる。」(p. 62) その代わり「資本家は生産に対する統制権を固めた。Ford において、或観察者は一日五ドル時代が来てから、男子従業員が『絶対的に従順』と説明している。常識はその関係を説明する。すなわち、仕事に地代が支払われるとき、労働者はそれを失わないでおうと考える。そこにはよりきつく働こう、規則性を示そう、そして会社の規則に従おうという意思がある。」(p. 62) そしてこのような雇用地代を支払った資本家は労働時間を短縮化することに抵抗した。そしてさらに「より長い労働時間は労働者に、少なくとも所得の条件で、会社により依存せしめる。依存性は統制に、究極的には利潤性に転化される。」(p. 64) 「今日、二つの要素がこの依存性を悪化せしめる。その第一は高い給与の仕事が少なくなった事である。組織化されているブルー・カラーの仕事の消滅は、……多くの男子労働者もし彼らが現在の仕事を失うならば、相当する地位を見いだす事が不可能であるということの意味している。ホワイト・カラーや経営者的な仕事も、会社社会アメリカの最近の縮小のために、同じ様な矛盾に直面している。第二に、長時間労働の仕事で稼いだ余分の所得は労働者をコストのかかる支出に縛り付けている。負債が依存の重要な部分である。すなわち、抵当を清算する、自動車ローン、そしてクレジット・カードの残高が長時間労働を絶対的に必要としている。それはまた最近の市場における一時的流行への子供の熱中でもある。」(p. 64) このように雇用地代の存在が時間短縮への障

害になっていると彼女は主張する。

さらに付加給与の存在が問題となる。「二十世紀の後半においては、月給や時間給の労働者の両者にとって、年金、健康と生命保険、有給休暇、そしてその他の付加給与は長時間労働の永久化の強力な誘因である。基礎収入へのこれらの追加の多くは時間を基礎ではなく、個人単位に支払われるから、それらはコストの構造に強い非継続性を創り出す。それは会社が長時間労働のより少ない数の従業員を雇用する方が、その労働時間をより多くの労働者（彼らはまた追加給与が支払われる）に割り振るよりもはるかにより多くの利潤をあげ得るようになる。戦後期の長時間労働は『付加給与の変化』に多くを負っている。」(p. 66) そして最近では付加給与の相対的な価値が急速に増加したのでさらにこの役割が強化された。

Schorによれば、長時間労働への圧力は、給料による支払いによっても強化されるとしている。これらの給料による被用者は二十世紀になって増加し、今日合衆国における従業員の40パーセントを占めるまでになっている。「病院専属の医者、投資銀行家、会社の顧問弁護士、そしてその他の専門家は、特に緊急の事態への努力と共に、規則的に週70時間から80時間働く事を期待されている。ある1970年代の研究は、*Fortune* の500会社のほとんどの経営者は、事業のための旅行を除いて、週に60時間から70時間働いていることを発見している。」(p. 68) 「同じ様な圧力は巨大会社の外、より小さな専門の『工場』にも存在する。建築と法律事務所、大学、出版社、そしてコンサルティング会社は彼らの給料労働者から長時間労働を要求する。」(p. 70)

このような労働時間の長時間化への動きに対して労働者はいかに対処しているのか。「1850年以来、合衆国の週労働時間は減少し始め、そして結局半分になった。この減少は市場の他の側面からの圧力の故に発生し、労働者達は彼らの労働組合を通じて労働時間を減少させるために、長い、苦しみの、そして最後には成功する闘争を続けた。」(p. 72) その後それに反対する事業主の闘争が行われ、労使の激しい闘争となった。しかし「第二次世界大戦後、労働者は労働時間問題で殆ど進展が無かった。より短い週労働時間が、印刷、ゴム、そして婦人服のようないくつかの産業で達成されたけれども、平均においては、フル・タイム労働者の週労働時間における削減は進展しなかった。労働組合はより長い休暇や他の有給休暇を団体契約し、そしていくつかの契約は寛大な協定であった。しかし、全体としての労働者の獲得物は控えめなものであった。」(pp. 76-7) ではどうしてであろうか。Schorによれば、「第二次世界大

戦が始まった時に、長時間労働への圧力は、止まらなかった。製造する労働週は1940年から1944年の間に七時間以上上昇した。資本は週40時間労働制の足元に軍事的敗北の責任を課する事によって、労働者を国内で攻撃する方法を用いた。戦争の英雄が労働時間の削減に反対する演説をしながら国内を廻った。戦争の修了と共に、国内を吹きまくった反コンミズムが更なる障害である事を証明した。悪質な反労働組合の規制法が制定され、そして南部を組織する運動が挫折した。」(p. 77) そしてまた、「戦後期の保守主義はまた労働者に資本主義を経済システムとしてより受容させるようにさせた。無拘束な成長と消費主義への初期の労働者の反対は消え失せた。1956年におけるAFL-CIO 第一回合同会議——皮肉にも、週労働の短縮の議題で——において、ある幹部は新しい立場を次のように要約した。すなわち『我々』はもし時間短縮が国民の生産の全水準がその発展速度を保ち得ないと言う事実を反映するのであれば、我々は時間短縮を歓迎しないということを強調する。』労働者は『国民は余りの多くの産出高とレジャーへの超過した可能性によって脅かされているという印象』を追い払うであろう。殆ど大部分の人々と一緒に、労働組合は成長の車に飛び乗ったのである。」(p. 78) そして彼女の言う消費第一主義へと入ったのである。「1969年より後は、人々が仕事をしている一年のパーセントとしての労働時間は上昇し始めた。週労働時間は徐々に上昇した。特に婦人がそうであった。……労働者群参加者は遂に年間の増加が仕事の余分の月と等しくなることを記録した。最も一般的な水準で、この増加した仕事への努力は高度な繁栄の時期が終了すると経済問題を解明する事が出来る。1950年代と1960年代の黄金時代の石油の価格の上昇、生産性の成長の純化、国際競争の強化、そして不活発な需要が続いた。景気後退はより深くなり、そして損害は多くなる。事業はコストを削減し、そして利潤幅を改善する圧力の増加の下に置かれる。予言できるように負担の多くの部分は従業員の上に『振りかけられる。』——とくに1980年代には、その時期は合衆国の会社への圧迫が最大であった。彼らの戦略は労働者に少ない払いでより多くをする事を要求した。」(pp. 79-80) そして、「経済的苦痛は二つの方法で労働時間を上昇させた。第一の方法は直接的である。すなわち、雇用主は単純により長い労働時間とより多くの仕事の努力を要求した。1980年代は超過労働時間と休暇、休憩時間、そして他の有給労働時間の削減の時期であった。」(p. 80) 「長時間労働の第二の原因は賃金の時間払いの率の着実な削減であった。時間によって支払われる労働者——合衆国の大部分の従業員——は1973年において平均賃金の最高を見た。

それ以来それは確実に低下し、そして今や 1960 年代の中ごろの水準になった。」(p. 80)

結局、彼女はこの章の結論として次のように言う。「或意味において、労働者達は超過労働時間を選んだのである。誰も Valerie Connor を八時間労働を二回も働かしたり、あるいは Bert Johnson に超過労働を強制したりしない。しかしその労働時間を働く圧力は会社から来ている。1970年代の生活標準の転換期に、従業員は今やはるかに多い労働時間を要求している。労働者群の80パーセントを構成する、生産に従事する、そして監督でない従業員にとって、これらの要求は本当のものである。我々の計算によれば、彼らの1973年の標準生活に到達するためには、彼らは年に245時間よけに働くか、あるいは年に6週余分に働かなくてはならない。」(p. 81)

IV 家庭における超過労働

「一つの社会として、我々は家庭の主婦と母親の役割を空想的に描くよりも、アメリカの家事労働を悩ます慢性的超過労働を認識する事を嫌がる。しかし時間の不足は我々の支払われる仕事の問題だけではない。——我々は家庭において、その外で働くのと同じように多くの時間働いているのである。家庭、そして子供は我々の時間を、制限無いように思われるほどにむさぼり食べる。二つの仕事を持っている多くの人にとって、——いわゆる働いている母親——その負担は巨大である。フルタイムの婦人従業員がその仕事につぎ込む週四十数時間に加えて、異なった研究は彼女は何処でも二十五時間から四十五時間家庭で働くと推定している」(p. 83)として Schor はまず働く婦人の長時間労働を指摘する。

「家庭の主婦の長時間労働は多様な原因がある。一つは仕事の遂行の標準の継続的な上昇である。第二は私的な食料の商業的選択肢が発展の初期段階において困った状態にあると言う事である。第三は家事労働は専門職業化されないから、専門化からの利益はない。」(p. 83) それぞれの要因の下にあるものは経済的要因である。まず第一に、家庭の主婦のコストは低い。彼女らは市場のある労働者群から排除されているので、彼女らを保護する要因は鈍くなる。そしてそれに代わって、彼女らの時間を使い尽くすという方向への強力な考え方が発展する。

「家庭の労働を経済的な側面から見る事によって、——家庭の主婦のコストや家庭

の技術の『能率』と言うような——我々は我々が我々自身を如何に養育し、我々の家を掃除し、そして我々の子供を育てるかを決定する経済的構造をよりよく見る事が出来る。しかし家事は伝統的に経済学の領域の外にあり、むしろ社会学や人類学の領域に属している。我々は我々の私的生活を市場にしようとする要素から免れたものと考える事を好む。」(p. 84)

「二十世紀はアメリカを激しく変化させた。我々のコロラドは馬から馬車に、農場から町へ、そして郊外住宅へ、サイレント映画からビデオと進んでいった。これらの変化を通じて、一つの事がそのまま留まった。すなわち、アメリカの家庭の主婦によって行われる労働の量である。」(p. 86) そして彼女は家庭労働についての研究成果を幾つか紹介する。そして、その結果、家庭労働の時間が変動していない事を見出す。そして、「労働時間の不変性に付いての奇妙な事は、それが家庭における技術革新と同時に進行しているという事である。」しかし「1950年に、家庭における資本設備の総量は飛躍的に増大した。屋内の水道、電気、そしてガスのような重要な技術的システムは事実上何処へでも設備された。同時に、多くの労働節約的器具がまた流行になった。——すなわち、自動洗濯機、乾燥機、そして電気アイロン、真空掃除機、冷蔵庫と冷凍庫、そしてゴミ処理機のような。1990年代においては、これらの革新のそれぞれは無限の労働時間節約の可能性を持っている。しかしどのそれもそうならなかった。家庭の労働に費やす時間を減少させる場合に、すべてこの高価な労働節約技術の避け難い失敗であった。」(pp. 87-8) 結局は家庭における機械化の進展による時間の節約は、家庭における主婦のサービスの増加、あるいはサービス標準の上昇によって相殺され、結局下手をすれば労働時間の延長にならざるを得なかったと Schor は述べている。すなわち「家の清掃、洗濯、料理、そして多くの他の家事労働のように、母親になる事の標準とノルマは劇的に上昇した」(p. 92) のである。

結局「アメリカの家事と女主人の労働は変化した。動物的な暮らし方の古い仕事、そして縫い物、そしてろーそく製造は消えてしまい、そして婦人は新しい仕事をとった。彼女らは彼らの家庭の寝室を整え、彼女ら自身の赤ん坊を母乳で育てた。そのモットーはより多く、そしてよりよくである。この歴史を振り返って、幾人かの観察者は家事労働のパーキンソンの法則が作用しており、その中では、『仕事はその完成のために利用できる時間をすべて拡大した。』そしてこの特徴には一定量の真実が存在する。すなわち、主婦の労働は彼女の通常の計画のすべてに拡大した。婦人が家庭で

作る物の新しい型を低いコストで市場経済が生産するとき、彼女らは彼女らの労働を他の仕事に替えた。主婦業は主婦が使える器具あるいは技術システムに拘り無くフル・タイムの労働に留まった。」(p. 94)

そして彼女は、「私の見解では、家事労働におけるパーキンソンの法則の作用の最も重要な説明は、市場経済からの主婦の孤立の増加であり、その結果としての彼女が市場での仕事で獲得できるものと比較しての彼女の時間の評価の減退である。経済の特有語において、労働の一時間の機会コストは減少する。何故なれば、市場の賃金——つの『機会』——は主婦の時間の選択的な（そして有利な）使用が排除される。この選択機会の喪失は明らかに主婦の時間の価値を低下させる。一旦低下すると、家事労働に使用するその時間を満たす傾向は強力である。フル・タイムの主婦の制度から、第二に床を清掃する、或いは子供達により多くの時間を費やす事へはもう一步のみである。」(pp. 94-5)

このようにして、家庭労働の標準の上昇とサービスの増大は進展し、そして家事労働は過小評価され、労働コストは小さいが、労働は節約された。「労働者階級において、既婚の婦人達はまた労働市場から排除されている。（男子の）労働組合運動は製造産業における婦人の雇用の反対を長い間主張してきた。男子は婦人からの競争を制限する事に関心を持っており、その婦人は不可避免的に低賃金であった。」(p. 95) 機械化の進展、経済の繁栄の結果、より多くの家族が主婦をもつ、すなわち働いていない妻をもつ余裕を持った。『働いていない』妻を持つ事は、中流階級である事を明らかにする地位の象徴になってきた。これは殆どのアメリカ人の家族のあこがれられる（そしてその時代に実現できる）理想であった。」(p. 95) 「結婚すると追放、組合の圧力、『働かない妻』の魅力、そして勿論家族への責任の結合が婦人を市場の外においておくに十分強力であった。1890年から1940年の間に、既婚の婦人の公式の労働力への参加率は5パーセントから15パーセントの範囲であった。」(p. 96) そして「それがそうであったときに、婦人の時間は人工的に低く評価される資源になってしまった。きれいな空気と水を、それが価格が無いと言う理由であまりに多く使いすぎるのと同じように、主婦の時間が浪費される。」(pp. 96-7) このようにして、婦人の時間は過小に評価されたことが、家庭労働の標準の増大と家事労働の日常性の歪みを生じさせたと述べている。

「議論の第二の要素は、株式会社アメリカを告発している。事業は婦人により生産

物を販売するために連続的な広告と社会的圧力に従わせている。家事労働は資本主義のための機能である」(p. 97)と彼女は主張する。そして「所得を稼ぐ可能性を除いても、家事労働は一つの機会コスト——主婦のレジャー時間——を持っている。もしそれが高度に価値のあるものであれば、レジャーの約束はサービスと標準の増大を禁止するであろう。何故それはより重要ではないのか？」(p. 98)このような方向を支えている一つの方向は「労働の倫理」であると彼女は主張する。それは中流の家庭に存在する怠慢への非難であり、「労働の文化的賞賛とレジャーへの誹謗」であるとしている。「労働時間を長くしている他の要因は、妻たちの労働が供給するサービスを夫達は要求するという事である。」(p. 98)そして「皮肉にも、コストを持たないものは——少なくとも直接的には——これらの余分のサービスである。男子はそれらを只で獲得する。そしてここに偏見の他の源泉がある。主婦は彼女の家庭内の労働には直接に支払われない。彼女は彼女の夫の所得の部分を受け取るが、しかし給料労働者にとっては、これは労働の負荷によって異なっていない。すなわち両方のケースにおいて、これは各追加労働時間は、いわゆる「雇い主」に何のコストも課さない。」(p. 98)「最後に、労働それ自身の性による分業は主婦の労働時間を長くしている。社会は家庭と家のための労働の責任を婦人にまかせることについて自らを反省していない。」(p. 98)

この中で家庭における機械化が進展したが、「我々が従っている道への明かな選択肢は家事サービスの商業化と専門化である。」(p. 99)それは大量生産によるコストの削減によって、半製品の供給が行われたり、栄養の高い食事を熱いまま家庭に供給したり、また洗濯屋が繁盛したりする。「ある時に、殆どすべての中産階級の家庭は召使いを雇い、或いは清掃に、あるいは大変少ないが洗濯屋の援助に支払った。しかし遂に召使いの不足が進展し、そして家庭内に援助者を広く雇う事は金持ちを除いてすべてで相当に低下した。……家庭の召使いが労働条件を標準化でき、そこで彼らの仕事を専門職業化し、そして小さな尊厳を保証するならば、家事労働は全体的な市場にあるサービスになるであろう。それがそうであったなら、支払われる援助を利用できない事は中流階級の婦人を彼女ら自身の床を掃除する事に戻してしまうであろう。他の反対の事が洗濯のサービスにおいて発生した。雇用される洗濯婦人や商業的洗濯屋が大きな進歩を、とくに1920年代にした。しかし自動の洗濯機と乾燥器は遂にそれらを事業の外に置いた。主婦達は彼女ら自身でそれを行った。」(p. 100)結局、家庭内

の労働の社会化は失敗した。

しかし、Schorによれば、「物事は変化し始めている。」(p. 102) それはフル・タイムで働く婦人が増加し、彼女らは家事労働と育児に通常の主婦の三分の二しか費やしていない。そして「婦人の家事労働における減少の多くは殆どの時間を家庭に捧げるグループ——すなわち子供を持つ既婚婦人——が消滅したことに帰せられる。」(p. 103)

「男子がより多く働く兆候がある。」(p. 103) それは夫が家事労働や育児に一定程度従事するようになったことである。

「価値観がまた変化している。婦人と男子の両方のかかなりの多数が今や婦人が給料のために働くときには、家事の責任は分担されるべきであるということを信じている。婦人の雇用されている時間は家事労働の分担に無関係であるという考え方はかつて持っていた力をもう持っていない。勿論、古い習慣はなかなか無くならないし、そして家事労働の分担を『信じている』男子がこの多くの場合支払の無い仕事の多くを現実に進んで行おうとはしない。」(p. 104) そして家庭内における労働の男女平等化はさらに前進するであろうと彼女は主張する。

「家事のサービスの商業化は問題として残っている。勿論、前には家庭で生産していたサービスの購入は大きく上昇している。アメリカ人は、より多くのレストランの食事と既に調理されている食物、保育、ドライ・クリーニング、そして彼らの両親の為に自宅での看護婦を購入している。」(p. 104) この問題は多くの問題を残しているが、「結局家庭内労働の我々の選択肢はこれらの関連する全体としての消費との関連で為されねばならないので、その問題に移ろう。」(p. 105)

V 労働と支出の潜行性の循環

「我々は歴史の中でも最も消費者志向の社会で生活している。アメリカ人は、西洋の国々における人たちよりも、年間にショッピングに三倍から四倍の時間を費やしている。単純に功利主義者の仕事としては、ショッピングは国民的熱狂の状態まで上昇している。……ショッピングはその固有の権利としてレジャー活動である。木陰のある遊歩道へ行く事も、それらの中で生活している十代の人々にとってだけでなく、大人にとっても普通の金曜日或いは土曜日の娯楽である。ショッピングはまた『家庭の

外での娯楽』の最も普通のウィークデーの夜の娯楽である。そして木陰のある遊歩道は何処にでもある。」(p. 107)そして「この国の最も一般的なレジャー活動の幾つかは拡大されたショッピング旅行に転じた。国立公園、音楽会、そして美術館は獲得の機会がある。」(p. 107)

そして同時に「借金はショッピング熱の重要な部分である。直接の支払は要求されないし、そしてクレジット・カードが持っている手段を越えることを多くの人々に誘惑する時は購買はより容易である。」(p. 108)「転落するまでのショッピング」症候群は、1980年代の間、すなわち長い購入狂騒ぎを普通視している十年間に多かったように思える。1983年から1987年の間の五年間にアメリカ人は5,100万台のマイクロウェーブ、4,400万台の洗濯機と乾燥機、8,500万台のカラー・テレビジョン、3,600万台の電気冷蔵庫と冷凍庫、4,800万台のビデオカセット・レコーダー、そして2,300万台のコードレス電話機を、只の一億八千万人の成人人口のすべての為に購入した。」(p. 108)そして、「国民は単一家族の規律正しい食事、車、家具、そしてレジャーへの支出が進んだ。平均のアメリカ人は便器に四十年前に消費したよりも二倍以上を消費している。そしてこれは、Gucci のセットの為だけでなく、すべての所得においてそうなっている。殆どすべての人々が戦後の消費ブームに参加した。四十年前に比較すれば、すべての所得クラスの人々——金持ち、中間階級、そして貧乏人——は、所得と物質的な財貨の方法で約二倍を持っている。」(p. 109)しかし、他方において、「所得はこの十年は平等性が少なくなり、そして多くの人々、特に人口の下位の四分の一の人々は、彼らの標準生活の相当の低下を経験していた。他の人々は彼らの所得をより長い労働時間によってのみ維持していた。もし労働時間が上昇しなければ、平均のアメリカ人労働者の年間の稼ぎ高はそれが始まった時よりも、その十年間の終わりには低くなっていた。しかも低下する賃金は主として最近の十年間における減少である。1950年代、1960年代、そして1970年代の「黄金時代」のより長い有利な点から、アメリカ人の豊富さの深さと幅は明らかに心に止まるものがある。」(p. 109)

しかし「戦後期の消費者主義は我々が我々の時間を使用する方法への効果無しでは無かった。人々が反映の物質的な報酬に慣れて来るに連れ、レジャー時間への欲求は侵食された。彼らはますます彼らの生活に満足を、意味を与えるものと見た。作業場と家庭の両方において、進歩はより以上の自由な時間ではなくて、より以上の商品とサービスに繰り返し転化されていった。雇用主は生産性の増加を追加の所得に向け

た。主婦はより以上の商品とサービスを生産するためにその労働節約の器具を利用した。消費者主義は、我々が良い生活に慣れ、我々の隣人と競り合い、あるいはそれぞれの人による選択によって創造される社会的圧力に捉えられるようになるように、我々を罫に掛けた。仕事と支出は相互に再強化し、強力な症候群——何の意味もなく我々が選んでしまうシームレスの編み物——となった。」(p. 111)

かくて「仕事と支出」の悪循環が続く。彼女は合衆国の人口を大きく二つに分け、中流として住宅所有者の約三分の二と大学卒業者の37パーセントをいれて、これらが限らない消費支出を行っているものとする。これらは「仕事と支出」が悩みの種になっている。他方において、「人口の最低の四分の一の嘆きは不平等における大波の繁栄である。より前の十年間には、繁栄の利益ははるかにより平等に分配されたし、社会の最低の裕福で無い部分にも拡大された。1970年代中ごろには、人口のより大きい部分が恐らく三分の二が『中産階級』あるいはそれ以上であると思っていた。その時には、おおくの労働者階級の家族は、多くの場合相当の超過労働の力によって、中産階級の生活スタイルを運営する事が出来た。彼らは彼ら自身の住居に資金を提供し、立派な自動車を、ある場合には質素な別荘を購入した。多くの人々は一つの所得源で生きていた。男子にとっての有利な製造の仕事は消えてしまったので、これは今や変化した。1980年代はまた、何とかやって行くために苦心している限界で生活している人口の部分が相当に増加してきた。」(pp. 113-4)

確かに「消費の成長は生活の質において主要な改善をもたらしたという事は疑いない。水道、洗濯機、そして電気器具は困難な、多くの場合骨の折れる仕事を排除した。特に彼女自身の家事労働のみをしていない貧乏な婦人にとってはそうであるが、しかし多くの場合誰にとっても同様であり、家庭の変貌は非常に自由化をもたらした。他の生産物はまた生活の質を高めた。コンパクト・ディスクは音楽愛好家の喜びを高めた。すなわち高性能のエンジンは自動車ファンを幸福にした。そしてファッションを手にいれたい人はデザイナーのスーツを愛する。」(p. 115) しかしながら、「多くの分野(公共安全、共同体の没落、教育制度の崩壊)での公共生活の質の低下を伴って、絶え間の無い成長と環境の悪化の関係がより明らかになってきている時代において、我々は少なくとも過去に戻らないで、そして消費者の商品のかつてない強大な量への我々の献身を再説明するべきであろう。アメリカ人は高画質テレビ、増加する異国への休暇、そして彼らの自動車における気温統制を必要とするか? 数百ドルに跳

ね上がった運動靴、五十ドルのしわ直しクリーム、あるいはかつて存在し(殆ど使われなかった)常備の自転車についてはどうであろうか? 家庭の一部は今や気泡風呂(あるいは蒸気シャワー)と衛星放送受信機が取り付けられている。我々がより広い観点で見たときに、すべてこれらの事は本当に我々の生活を良くしていることを保証する事であるのであろうか?」(p. 115)と Schor は疑問を投げかけている。そして彼女は過去四十年の増加する消費が我々をより幸福にしていまいと断定している。しかも、「物質主義は我々を幸福にするのを失敗したのみではない。それはまた不満のそれ自身の形——豊富の中でさえ——成長させた。」(p. 116)

Schor によれば、終わりのない物質への要求は人類の基本的な性質であると考えられているが、「その一般性にも拘らず、人間の性質に付いてのこの見解は間違っている。人類は何物かに対して努力する生来の欲求を持っているけれども、物質財について前もって定められているのではない。その中で物が高度に制限された役割を演ずる社会の多くの例が存在する。中世のヨーロッパにおいて、相対的に利欲心が殆ど役割を演じなかった。普通の人々、彼らの生活はその時々標準によって確実に不安定にされているが、お金よりもレジャーへの強い選好を示している。十九世紀と二十世紀の初めのアメリカにおいては、多くの労働する人々は物質財に対する制限された欲求を示している。消費が相対的に重要でない社会の多くの例は、人類学的、そして歴史的文獻に見いだす事が出来る。」(p. 117)

しかも彼女によれば、「消費主義は人類の性質の歴史に関係の無い性質ではないが、しかし資本主義の特殊な産物である。市場システムの発展と共に、消費主義は初めて金持ちの特権階級を超えて『拡大した』。中産階級の成長は、潜在的買い手の大きなグループと大量生産の文化が物質財を巡って進んで行く可能性を創造した。この過程は歴史的経験の中に見られるだけでなく、ブラジルやインドのような所で現在成長している。そのブラジルやインドでは大量の中産階級の成長が消費主義と長い間の価値基準の破壊が広まるのに貢献している。」(p. 117)

Schor によれば、合衆国において「欠乏の心理」が「豊富の心理」に変わったのは1920年代であるとしている。「これはアメリカン・ドリーム、あるいはその時期には『生活のアメリカ的標準』と呼ばれたものが、国民的願望をつかまえた十年間であった。」(p. 118)そこから現実に達成できない場合には不満が育成されることになるのであるが、「多くのアメリカ人によって表明されている不満は製造業者によって育成

一定までは創造さえされた。事業は『強引な販売』の道を通って始まった。消費者信用の爆発的增加が、自転車、ラジオ、電気冷蔵庫、そして洗濯機、——宝石と外国旅行でさえ——分割払いで購入出来るときに、簡単に始まった。1920年代の終わりに、自動車、ラジオ、そして家具の60パーセントが『分割払い』で購入されている。事実上お金を持っていなくて購入する能力は利根的満足、期待の拡大、そして究極的には物質主義の風土を育成することを助ける。」(pp. 118-9)「1920年代はまた広告の十年間でもある。広告業者はしたい放題をした。すなわち、くるみから家庭用石炭まですべての物が別々にブランドが付けられ全国的に広告された。勿論、広告類は長い間生存してきた。しかし、新しい何物かが、規模と戦略の条件で現れた。第一に、事業は消費者に対して心理的武器として広告を用い始めた。『大広告』が発明された。……広告は生産物と個人の強力な主体性との結合を発展させる。最後にそれらはすべての事、そして何事も——自尊心から地位、友情、そして恋愛——約束するようになる。」(p. 119)

「新しいそして限界の無い要求を創造するキャンペーンは攻撃されないことはなかった。労働運動家や社会改革者はほとんどのアメリカ人の為に消費主義の長期の結果を理解していた。すなわち、それはアメリカ人を資本主義の『リズの籠』の中に閉じこめるのである。贅沢品の消費は長い時間を必要とする。物質主義は退屈、無意味さ、そして近代労働の健康破壊からの救済策を用意しない。」(p. 120)

「最後に、我々は消費それ自身の誘因を過小評価するべきではない。労働者階級と貧乏人、特にヨーロッパ或いは合衆国の田舎からの移民してきた人々は物質の欠乏の中で成長した。アメリカの都会で利用できる生産物の陳列は好ましく魅惑的であり、いつも好ましく見える。中産階級にとって、消費は自身の満足を維持する。デザイナーのタオル、或いは最新のモデルのGMの車は特権的、優位性、そして裕福の感覚を創造する。」(p. 122)

「1920年代に根を持っている消費主義は、不満足の考え方を前提にしている。人が持っている量では決して十分ではない。含まれている心理は次の買い物が幸福を生み出す、そしてまた次である。ベビー・ブーム時代の著作者、Katy Butlerの言葉では、新しいソファ、より静かな道、そして休暇用の別荘であった。今日の贅沢品は明日の必需品であり、もはや評価されない。Jonesらが新しいソファあるいは別荘を購入したときに、これらの獲得はもはや満足では決してない。消費主義は落とし穴

に満ちたものを生み出す。」(p. 122)

その結果、「所得とレジャーの間の選択の場合に、相対的な立場への追求は我々を所得の方へ偏向させる。それは地位の比較はほとんどの場合に商品——自動車、衣服、家、別荘さえも——について行われるからである。もし Jones 夫人が長時間働くならば、彼女は別荘、デザイナーのドレス、或いは美しい車を購入できるであろう。もし彼女の隣人 Smith 夫人がその代わりにより多くの自由時間を選ぶならば、彼女の二台入る車庫や大きい衣服入れは半分は空であろう。競争が見える商品の方向により向かう限り、その傾向は両方の夫人に労働時間を減らすよりも所得の増加を選択させるであろう。」(p. 123) それ故に、「所得増加の踏み車をやめて、そしてより多いレジャーのライフ・スタイルに入る事は易しい事ではない。」(p. 123) そして、「第二の誤った循環は、消費から得られる満足はその効能が短いという事実から起こってくる。多くの人々にとって、消費は習慣を形成している。耐性を発展させる麻薬の常習者のように、消費者は満足の一定の水準を維持するためには追加的な投入を必要とする。」(p. 124) 「我々の生活は我々が当然と思うように習慣化されてしまったもので満たされている。屋内水道はかつては大変贅沢なものであった。——そして今尚世界の多くの所ではそうである。我々が異なった考え方を与えられないライフ・スタイルに染まっている。その同じ事が最新の家庭器具だけでも全体に真実である。——すなわち、レンジ、冷蔵庫、そして電気掃除機は家庭内風景の一つになっている。我々は我々がドライブするある種の自動車に大きな注意をむけているが、しかし車を持つという事実はかなり以前から成人に成長すれば普通になっている。」(p. 124)

Schor はこの分析の目的を次のようにいっている。「私の目的は、従来無視されていた消費の分析——労働市場で作用する刺激構造との関連で——に新しい側面を付け加えることである。私が説明した消費の罫は、生産システムに組み込まれている長時間労働へ向かう傾向のはみ出た側面である。我々は単に支出の大波の型に捕らわれているのではない。——消費者文化の多くの批判によって明らかにされた問題である。全体の物語は我々が働きそして支出する、そしてさらにより多く働き、そして支出するという事である。」(p. 126)

ではどうして彼女の言う「消費の罫」は発生するのであろうか。彼女は新古典派の「労働者は彼らが必要とするものを手に入れる」を批判しながら次のように主張する。「私はこの問題についての新古典派の分析を転じて、労働者は彼らがえたいものを得

ているよりも、彼らが得ているものを得たいと思っていると主張したい。私の出発点は個々の労働者よりも企業である。企業が彼らが彼らの従業員に要求する労働時間を決定する。これらの労働時間と共に、労働者の消費水準を決定する所得の水準がある。習慣形成と相対的地位への配慮の結果として、人々は支出の水準を適応させる選択を発展させる。消費への態度は予め定まっているのではないが、しかし稼ぎと消費それ自身の過程で形成される。」(p. 127)

そこで彼女は「労働者が彼らが必要とするものを手に入れる」という新古典派の主張の「難点は、労働者達が労働時間を決定するという事にある。しかし彼らはそれを決定するのか？ 証拠によってではない。この問題に付いての私がみたすべての研究は、労働者達は労働時間を選択する自由を欠いているという事を発見している。」(p. 128)そして「事実において、制度派労働経済学者(『真実の世界』を目指している)は企業が労働時間を選択し、従業員にそれを取るか辞めるかの選択肢を与えるという見解を長く維持してきた。今やこの制度派の見解は統計的証明でバック・アップされている」(p. 128)と主張している。「これらの発見は労働者達は労働時間の問題に付いて自由を持っていないということ意味しない。ムーライト労働や退職は選択肢である。そして労働時間は職業や産業によって異なり、その結果労働者達は計画を交替するためには彼らの職業を辞めることが出来る。しかし調査は殆どの労働者にとって、これらの調整は労働時間の制限への結びつきを排除するためには十分でないという事を示している。」(p. 128)

そしてさらに次のように主張する。「私の方法と新古典派のそれとの間の相違の第二の大きな点は選択の性質を意味する。新古典派の経済学者は市場は労働者が望む時間を供給しているという証拠として労働者の態度を指摘する。1985年の調査からの結果は典型的である。すなわち、彼らは所得においてそれに相当する変化を伴って、彼らの現在働いている時間を、より多くか、より少なくか、或いは丁度を彼らが選択するかを尋ねた場合、労働者の約三分の二が彼らの現在に時間／所得の選択肢に満足している事を報告している。」(p. 129)しかしこれは彼女によれば強制されていることを意味するとしている。

そしてこの二つの解釈の間の相違を区別できるのは将来展望の調査であるとしている。すなわち、「1978年の'Department of Labor'の調査において、回答者の84パーセントは、彼らは将来の所得の幾らかあるいは全部を自由時間の追加と交換したいと言

っている。殆ど半分 (47パーセント) が賃金の10パーセントの増加のすべてを自由時間と交換したいといっている。只の16パーセントが労働時間を減らさない貨幣を選択した。」(p. 131)

「これらの発見は労働と支出の循環の基本的な特徴を支持している。——現在と将来の所得に対する態度の相違である。すべての以前の調査のように、このグループは現時の所得 (その選択肢を選んだ小さいパーセントのみ) を諦められないのである。多分彼らは彼らの現在の標準生活に物質的にあるいは心理的に愛着するようになっているのであろう。しかし将来所得を消費する欲求は強制力が少なく、最近の心理学の調査と事実が一致する。新古典派の解釈において、この不均衡は説明されていない。」(pp. 131-2) 「より多くの研究や調査が、特に労働時間と時間に付いての選択を追跡する事が必要である。しかしながら、その発見は経済学の論述を支配している労働/レジャーの選択の楽観的な見解に疑いを投げかける。我々がもはや人々が欲求したり必要としたりするものへの反応として、労働と生産物の市場が極大の成果を用意するという単純な仮定を信頼出来ないという事は明かである。我々が欲求するものと我々が得るものとの間の相互作用は更に複雑になってきている。」(p. 132)

「労働と支出の循環の力の一部はその社会的普及である。個々人は最も近い意思決定者であるけれども、そして彼らの行動は社会的規範や習慣によって影響され制限される。労働と支出の循環の社会的な特徴は、個々人は彼ら自身の力でそれから脱出する困難な時間をもっているという事を意味する。これは何故、より少ない時間の仕事を望みそして『労働と支出』の幻惑が無くなっているにも拘らず、労働時間が上昇しているのかの理由である。」(pp. 132-3)

Schor は John Does というアメリカ人が自分の労働時間を半分に減少しよう決心した場合を考えてみる。そうなると彼はパート・タイムで働かざるを得ない。「労働市場の側にも——低賃金、少ない付加給与、そして職業の選択におけるきびしい制限が存在する。フル・タイム労働の支配はまた消費の側にも影響がある。」(p. 134) 結局このような夫婦は基本的な生活を獲得するのは難しくなる。「注意深い予算を立てても、Does のような夫婦は基本的な生活 (家、食物、そして衣服) を調達するのが難しい。何故なれば、合衆国の標準生活は少なくとも一人のフルタイム労働の所得にあっており、そしてさらには二つのフル・タイム労働の収入にあうようになっている。家賃は Does の所得に比較して高い。部分的には、これは最近の十年間の価格上昇の故

である。しかしそこにまたより根本的な障害がある。私が主張したように、現在の家とアパートは大きくてそして贅沢である。それらは屋内水道、セントラル・ヒーティング、レンジ、そして冷蔵庫がある。それらは物置、ガレージ、そして個人用の寝室のような高価なものを備えている。我々の社会において、家は家の標準として受け入れられると認められる法的そして社会的慣習に適合せねばならない。困難性は家の市場を支配している社会的基準はフル・タイムの所得（あるいは二つの所得）に適合しているという事である。それは生活費をこれらの日々に高くするだけではない。それはまた給料の半分だけで余裕のある基本設備の家は殆ど無いということである。もし Does 夫婦が、お金を節約するために、物置、ガレージ、そしてセントラル・ヒーティングなしで住もうと思えば、彼らはこのような住居を発見するのは殆ど出来ない。」(p. 135)

結局、「社会的規範の強さは労働の性質を変化させることが出来ないという事を意味しない。パート・タイム雇用は多くの人々にとって実行可能な選択肢になる事が出来るであろう。しかし社会的規範の存在は、新古典派経済学者が予測するように、市場における個々人の選択の実行のみを通じて、変化が発生するのではないということを示している。Prisoner's Dilemmas と悪循環が存在するところでは、変化は社会的規範への介入を要求する。——政府、労働組合、専門団体、そして他の集団的組織からの介入をである。」(p. 136)

このように論じた後に、この問題についての現在の経済学の仮定の問題に批判を向ける。すなわち、「経済学という学問は伝統的に経済人、或いは経済合理人の構成概念によって人類を表している。経済人は単純な人間である。彼は一定の選択肢を持っている。そして彼は彼の幸福（『効用』と定義される）を最大にしようとする。彼の行動は、『精神分析的男子』（脅迫観念によって動かされる人）とは異なり、或いは『社会学的男子』（社会的規範によって限界づけられる人）とも異なり、冷静で合理的である。経済人は一人で行動する個人であり、彼は最大の効用を彼にもたらすであろう行動のコースであると彼が信じるが故に彼が行う事をするのである。私の目的にとって、経済人の最も重要な個性の特徴は、彼を満足させる事はないという事である。彼は常に選択している。彼は特定の財にあきる事になるけれども、全体的に彼を悪くするより多くの財をもつことは決していないのである。そしてより多くは常に彼を良くするが故に、彼の欲求は無限である。」(p. 136) そして彼女は次のように言う。「も

し彼を誰にでも説明するならば、それは二十世紀のアメリカ人の消費者である。ここに我々は物質主義者の真髓——財の獲得に大きく集中し、満足をしらない問題に恥知らずに快楽的、そしてそれに献身する——を見いだす。」(p. 137)

「消費主義それ自身の意味は既に『食いつくす、むさぼり食う、浪費する、破壊する』という初めの否定的な意味から、一つの大きな転換を通じて進んでいる。今日、第二の転換が、欲求する、購入する、所有する、用いる、そして捨てるの新しい方法を伴っている。消費財における高貴さを切望する代わりに、我々は衣服から自動車や付属品の高度な品質そして長い耐久性のあるという事を所有への開拓的な意味を持たせる事が出来る。我々は、物をそれが流行遅れになり、あるいはそれらにあきるまでではなく、それらが傷むまで用いよう。究極的に我々を良くしないままにする新製品を避けるために、先見の明が必要である。」(p. 138) Schor はこれらの転換の方向を次の節で提案する。

Ⅶ りすの籠から脱出する

「経済学者はすべての物の価格は知っており、そして無い物の価値を知っている人であるとはよく言われる事である。時間の問題については、我々はすべて経済学者になっている。我々は時間の価格を痛いほどよく知っている。——第二の仕事、超過労働は一倍半の賃金で余分の所得を稼ぐ。その過程において、我々は時間の真の価値を忘れてしまっている。」(p. 139)

この近代的な時間意識の始まりは資本主義の発展にあると彼女は主張する。「資本主義が時間の『価格』を上昇させたとき、人々は時間を重要な資源と考えた。事実、出現する市場経済のイデオロギーは時間の隠喩で満たされている。すなわち、節約時間、時間を賢く使う、時間を『過ごす』事に対する説論などである。労働の倫理それ自体は或意味において時間の倫理である。Benjamin Franklin が時間は金なりと説教したときに、彼は時間は生産的に利用するべきであるという事を意味していた。ついに資本主義は時間を価値あるもの以上にした。時間と貨幣は相互に交換を始めた。Franklin の警句は処方としてではなく、現実の説明として新しい意味を持つようになった。貨幣は時間を買ひ、そして時間は貨幣を買う。時間それ自身が商品になってきている」(p. 139)という言葉に現されている。そこで時間の販売は労働市場にお

いて発展し、そして殆どの人々にとって、その影響が最大の場所となった。今日労働時間の販売は至るところで受け入れられている。……労働者達は初めは伝統的な『時間無し』のイデオロギーから、時間の基本的な考え方に闘争した。彼らは雇用主の時間と時間の訓練を拒否した。数十年が経過し、彼らは時間の所有に対して闘争した。——それらが幾らか、ボスの時間は幾らか。そして今日、超過労働時間への多くの闘争がある——それは彼らが出来るだけ多くの時間を販売する権利として。」(p. 140)

「時間の販売の価値と時間と貨幣の同等性はよく知られている。すなわち、各自時間に価格表を付ける事は人(或いは社会)に時間を能率的に利用するようにする。しかし、そこにはまだ悪もある。それはあまりよく知られていない。時間の価値の多くの側面は純粹の市場交換に組み込むのは難しい。——それは社会生活への時間の個人的利用の効果、或いは自由時間への基本的な人間的権利のコンセプトのようなものである。すべての社会は時間の文化を持っている。我々は恐らく時間を貨幣に分解してしまう方向へあまりにも進みすぎたのであろうか？」(p. 140)

「貨幣に時間を多く代替すればする程、時間の価値を独立した手段として確立する事はより困難になる。そしてこれを判断する能力を我々が減少させる事は、長時間労働に貢献する。もし市場が貨幣の手段としてのみ認識するならば、仕事が『余りに多くの時間』を必要とする事は意味の無い事であると主張するであろう。すなわち、それは『あまり多くの貨幣』を払うと言うのと同じ事である。」(p. 140)

そこからは次の問題が発生する。「時間が貨幣であるところでは、それに支払う事の出来ない人々——低賃金労働者、子供、年老いた両親、或いは共同組織——の為に時間を保護する事は出来ない。そして我々自身にとっての休養、ホビー、あるいは睡眠に対して時間を保護する事が困難である。長時間労働への圧力はあまりにも強力になってくる。しかし常識は我々に労働時間はあまりにも長くありうること告げている。超過労働時間は不健康であり、そして反社会的であり、そして究極的には生活の質を侵食する。」(p. 141)。

それはまた次のようにもいえる。「時間と貨幣の比例性は他の次元の社会的効果を持っている。それは、明確に不平等である(貨幣)ものの中に平等に配給される(時間)資源に転化する。富と所得の両方は不平等に配給される。しかしすべての人は一日に二十四時間持って生まれる。そして貨幣は一定の範囲で時間の配給を歪める(所得の高い人ほど長く生きる)けれども、時間の『所有』は尚ほるかに平等に配分され

る。時間の販売はその平等主義を掘り崩す。仕事以外の時間はより貴重になってくるので、貨幣を持っている人はそれを節約する事が出来る。そしてこれが起こっているのは明かである。第一級の職業人は彼らの食事を料理するため、彼らの子供の面倒をみるため、彼らの為に順番を待つ為にさえ人を雇う。小さな会社が、食料雑貨店で買い物をする事から、電球を替える事までのサービスを提供することによって発生する。時間を売っている人々は経済的にあまり良くない地位に置かれている人々である。——それは中流階級の成長が召使いの大量の需要を生み出した十九世紀の勿論初めに発生したように。時間の今日の欠乏は新しい召使い階級を生み出すようになる危険を持っており、そして時間の平等主義を掘り崩す。」(p. 141)

しかし、Schor は次のように主張する。「自由時間への権利を確立する事は、ユートピアに見えるであろう。——しかし交換を制限するという原則は既に確立している、自分自身を奴隷に売る事は非合法である。子供を売る事は非合法である。時間の交換を制限する原則さえよく確立している。州は植民地時代から労働時間を制限している。自由時間の権利は、例えば祝日のように何かの形で法律で規制されている。すべての中で最も重要なことは、社会保障制度であり、それは労働者は彼らの生活の終わりの期間にはレジャーの権利を持っているという事を保証している。私が主張している事はこの権利の拡大である。——その結果すべての人が、彼らがまだ若い間に、そして彼らの生活の全部に渡って自由時間を享受出来る。」(pp. 141-2)

そして、労働時間の短縮の第一歩は次のように主張される。「この権利——長時間労働に頼る事を減少させる事——を得るために、仕事と支出の循環を破る事が必要である。変化は多くの側面において為されねばならない。すなわち、雇用主の刺激を変更する事、最低の支払いを受けている賃金を改善する事、性の平等を創造する事、消費の自動的循環を先取りする事、そして全体的に、時間の価値のその価格よりの独立を確立し、その結果貨幣への安易な代替をしない事である。」(p. 142)

「私はすべての給料の仕事は公式に（そして法的に）標準の計画を付けるように提案する。年々の支払いにそって、すべての地位は労働時間の明確な標準——例えば九から六時間の計画——と特定の数の休日、休暇と個人用の日、そして病気の休日を持たねばならない。かくて、もし従業員が現実にもその標準よりも長く働くならば、その労働時間は、超過時間と数えるであろうし、そして企業はそれらに支払いをせねばならない。理想的には企業は年間の労働時間を示し、そしてその範囲内でフレキシブル

な計画をする事になる。勿論、多くの、そして恐らく最大の給料を取る地位は、彼らが賛成しない場合でさえ、公式の就労時間を既に持っているであろう。そして支払われない時間は常に前もって特定されている。しかし、標準労働時間は多くの最長の労働時間の分野、金融、コンサルティング、上級の経営と管理、そして法曹のような分野において出発するであろう。(私は標準労働時間の量に限界を設定するのではなくて、政府が企業に或標準を設定するという事を明らかにせねばならない。)(p. 142)

しかし、彼女によればどれもこれもすべての問題を解決するのではない。すなわち、「このシステムは幾つかの職業の超過労働時間にとっては万能薬ではない。雇用主はなお大変高い標準労働時間を設定出来、そしてそこで労働時間の標準化の利益が相当に相殺されるであろう。日本の実務の複写さえ可能であり、そこでは従業員はどのような標準も無視するように微妙に(あるいはあまり微妙でなく)圧力をかけられている。給料取りの従業員は彼らのキャリアを前進させるために、超過労働を主張しないし、休暇を差し控える。——経営者の四分の一が支払い無しで仕事にきたカリフォルニアの企業でおこったように。最も競争的な環境においては、会社の文化の転化なしには長時間労働の偏見を防ぐ事は出来ない。しかし、明確に定義された計画は雇用主に有効な限界を設定し、そして従業員に彼らの超過労働時間に支払われる権利を与えるであろう。そして人事の競争は超過的に長時間労働日を設定する事を思いとどませる。もし Salomon Brothers で訓練を受ける人が八時間労働を要求し、そして Goldman Sachs が七時間を設定するならば、前者は不利益である。自らの時間を要求するこれらの従業員にとって、労働時間の標準化は効果的である。」(p. 143)

さらに、Schor は次のように提案する。「超過労働時間への支払いに付いての私の第二の提案は、会社は時間に貨幣ではなく、時間を時間で支払い返すという事である。この理念は『埋め合わせ』時間の中に超過労働時間を転化させる事——そしてそれを自発的にすることである。すべての仕事——給料取り、時間労働、或いは出来高労働——は標準労働日、標準週労働、そして標準年労働を持っている。会社は超過労働を懇請する——要求する事ではないが——、そこでは時間交換で償われる。今日働いた超過労働時間は将来において支払われる休暇時間を生み出す。労働者は超過労働時間を貯金する事が出来、それらを蓄積する事が出来る。彼らはより長い休暇を貯金する、安息日をとる、或いはフル・タイムの支払いでパート・タイムにいく事が出来る。超過労働時を埋め合わせる時間への移行は労働する時間の総量を減少させるだけ

でなく、また仕事をよりフレキシブルにするであろう。それは学校へいく、両親であること、あるいはボランティアの仕事をし、同時にフル・タイムの仕事をするのはるかに容易にするであろう。勿論、時間を減少させる計画には限界があるであろう。埋め合わせ時間或いはボランティアの計画を含む現存する実務は通常前もって通知をするとか、あるいは経営者の賛成を得るとかの若干の制限がある。しかし両方の側がフレキシビリティに好意を示すならば、これらの制限は面倒な事ではない。」(p. 143)

しかし、彼女によれば、労働者にとって超過労働時間は相当な貨幣を稼ぐ唯一の方法であるので、なかなかこの提案は受け入れられないとしている。しかし、彼女によれば、「超過労働時間が利用できる所では、仕事により以上支払われるという考え方は、ある意味では幻想である。最近の研究は、企業が超過労働時間のプレミアムの効果の幾らかを『取り戻す』ので、超過労働を行った労働者はより低い時間賃金を受け取るという事を示している。もしこの調査が正しいならば、時間賃金は超過労働の排除に対応して上昇するであろうといえるであろう。そうであっても、この提案には相当な抵抗が存在する。ある組織化された工場において、先任権のある労働者がレイオフへの選択肢としてワーク・シェアリングに反対し、すべての労働者の労働時間を減少させるよりも幾人かの労働者がレイオフされる事を選択した。」(pp. 144-5)

しかし「より必要な変革はパート・タイム労働者をより適当な形にすることである。現時点では、パート・タイムの地位の大部分は低賃金、低移動性、そして付加給与無しである。しかし人々のより多くの数が彼らの時間を減少させる事に興味を現している。専門家と経営者の為の障害は特に強力である。多くの場合、パート・タイムは経歴の抹消と平等である。」(p. 145) すなわち。パート・タイム労働者は過去の経歴は評価されない。そのために最低の賃金水準になるであろう。そして、パート・タイム労働者が決定的に不利なことは付加給与が無くなることである。これを解決するためには、すべての人に政府が保証する一般健康保険を施行する事であると彼女は提案する。

第二の方向は、仕事の分配の制度化である。二人で一人の人の付加給与、責任、仕事、そして給与を分けることである。

「仕事と消費の結びつきを切断するために、我々は既に支出された所得と単に期待されている所得の間の心理的な差異を追求せねばならない。時間とそれを交換しよう

としない、あるいは出来ない現在の支払いに人々は強く固執するが、しかし世論調査は追加的な時間をカットして将来の所得を使おうとする強い感情がある事を示している。会社が法律によって人々にこの選択肢を与える事を要求されたと想像してみよう。我々が『生産性の挑戦』を来るべき十年に取ったときに、貨幣に対する偏向はあるであろうか？」(p. 146)

Schor は将来の生産性の増加を支払いの増加と労働時間の短縮とに分配する選択肢を示す。そして、「正確にはこの選択肢が今日利用できるかどうかを如何に計画できるか？そこには二つの基本的パラメータが存在する。すなわち、会社が与えようとしている所得の量、そして労働者が自由時間に向かって計画しているその一部分である。前者が2パーセントに加えるにインフレーションの修正であり、そして後者は100パーセントであると仮定してみよう。そこで、現在から十年間——いわゆる2002年——に、平均の労働年が340時間低下——年に1,960時間から1,600時間に——するであろう。これは追加の二ヶ月の休暇のために、あるいは61/2時間労働日に十分である。現物の所得の増加より低い率において、レジャーの獲得はより低い。より高い率は急速な獲得を生み出す。もし個人の現物の所得が年に4パーセント上昇し、そしてそのすべてが時間短縮へ向かうならば、十年後は年々の労働年は1,300時間近くになるであろう。——600時間以上の自由時間の全体の獲得である。この個人は一年にワン・セミスター学校へ行き、四ヶ月の休暇をとり、或いは一年間に四時間の日労働日に従う事になる。」(p. 147)

彼女はこのような計画が実現するならば、そこでは購買力は停滞するとしている。購買力がインフレーションには負けないが、しかしこれを越えては進まない。しかし、「調査のデータは如何に人々がそれらに反応するかについて幾つかの考え方を与えている。1978年の調査では、84パーセントの労働者は、彼らは幾つかの将来の所得との交換を選択した。——100パーセントの交換の選択肢の殆ど半分である。1989年の世論調査は彼らが選択する二つの経歴の道をどちらかを人々に要求した。すなわち、『一つは貴方自身のフル・タイムの労働時間を計画し得るようにし、そして貴方の家族により注意し、しかしよりゆっくりとした昇進になる事であり、そして他は固定的な労働時間で貴方の家族にあまり注意しない、しかしより早い経歴の昇進がある事である。』十人のうち八人近くがより自由の多い時間の道を選んだ。事実において男子と女子の両方の大多数が(72パーセントと82パーセント)がこの選択肢を選ん

だ。「五十五パーセントがまた彼らはもしそれが家族に少ない時間を費やすことを意味するのであれば、より大きな責任を意味する昇格を受け入れようとは思わない」と言ったが、それはそう思うと言った34パーセントと比較し得る。勿論、仮定的な質問であるので、彼らがこのように現実に行動するという保証はない。しかし、たとえばそんな参加が相当に低——例えば三分の二あるいは半分——かっても、その計画は大変人気があると思われるし、そして労働時間に大きな影響を最後には与えるであろう。」(p. 148)

しかし、彼女によれば、この国の多くの仕事好きの人がおり、その人々はこれの選択肢をとらないであろうとしている。これが一つの問題点である。

またもう一つの問題も存在する。「勿論、多くのアメリカ人は賃金は低く、或いは彼らの雇用の条件は不安定であり、その結果彼らはどのような所得をも諦める余裕は出来ない。——現在或いは将来においても。そして彼らの数は増加してきている。すべての合衆国の労働者の三分の一近くが、フル・タイムの計画で、彼らを貧乏から逃れるに十分でない賃金を現在稼いでいる。私が強調したように、数百万の人たちが超過労働時間、ムーンライト労働、そして複数の稼ぎ手をもつ家族を通じてのみそれを終わらせる事が出来る。そして多くの人々が全然それを終わらせる事は出来ない。」(p. 150)

そして Schor はそれに対しては次のように主張する。「自主的にレジャー時間を増加させる事の危険は、他との不平等性を取り替えることが出来るという事である。——所得の不平等性は時間の不平等性を創造する。トップの三分の二は徐々にレジャー階級になる一方で、最も貧乏な第三の階級はかつてよりも多く働いている。——より多くの労働が利用できるようになるときは、より多く働く。自由時間を獲得している人々はそれを可能にする金銭的資源——教育、家庭、そして銀行の勘定——を既に持っている人々である。彼らはおもに白人で、上流と中流の階級である。」(p. 150)

この不平等を修正するために彼女は自由時間の強制的増加を主張する。そして「結局、時間の不平等性は所得の不平等性の基礎を修正することによって解決される。最も貧乏な人々が生活できる賃金を得られるときにのみ、自由時間への彼らの権利を実現出来る。そしてそして経済的奇跡が無ければ、その一部はトップにいる人々からもたらされなければならない。1980年代において、金持ちはこれらの下層の人々から幻想的な大きな量を掴み取った。いまやそれを返却させるときである。」(pp. 150-1)

そのために彼女は二つの戦略を主張する。「第一に、会社は、従業員の間に現存する賃金と給料における差異を、最低層に高く支払い、そしてトップに少なく支払うことによって、平等化する事を始めねばならない。合衆国は産業化された国民との比較における賃金の不平等性において高い水準にある。第二に、連邦最低賃金は引き上げるべきであり、経済の平均賃金を指標とするべきである。労働者の限定された部分のみが最低賃金を受け取っているけれども、それが引き上げられれば、それは幾らか高い人々の賃金を上昇させる圧力を創造する。それ故に最低賃金を上昇させる事は、多くの低賃金労働者の生活標準を改善させる効果的な戦略である。最後に、私の前の議論から明らかであるべきであるが、労働時間の問題は労働それ自身の配分の平等性なしには解決する事は出来ない。これは我々はこの経済を悩ましている失業と過小雇用の危機の二重の解決を見いださねばならないことを意味している。このような解決は、全体の労働時間のより平等な配分を保障するために、連邦政府からの継続的な貢献が要求されるであろう。」(p. 151)

同時にもう一つ重要なことがあるとして彼女は次のように主張する。「私の提案はまた、性の不平等を再生産する危険をおかすものである。提案はそれ自身——パート・タイム労働をより望ましいものにする、あるいは所得と時間の交換を人々に許すというような——は性差別に中立である。しかしながら、性の役割の基礎にあるものの変革無しに、婦人はそれらからの利益を取るようになるであろう。もしこれが発生すると、婦人の家事と育児への現在の責任を再生産するであろう。それ故に、家族の中での分業の平等化をするための進行中のフェミニストの努力は私の提案した改革のより大きな成功にとって決定的である。もし男子が子供と家事へのより多くの責任を取る——多くの人が現在言っているように——ならば、彼らはまた家族の義務と両立出来る労働の型を選択しようとするであろう。その場合には、この提案の効果は全く異なるであろう。彼らは、私が主張するように、両親の役割を分担し、そして二つの仕事をより両立させることによって、固定的な両性の役割を崩壊することを助けるであろう。しかしながら、これらの変容は合衆国の職場の文化を、育児の必要、病気と老人の世話、そして他の家の中の労働の社会的な必要により適合したものにするために、変革する事が要求される。そしてその変革は男子と婦人の両者に発生せねばならない。」(pp. 151-2)

このような計画に対しての障害は、外国の企業からの競争である。「事実、アメリ

カの競争者の仕事の大多数は我々が行っているよりも少ない事はない。事業が、アメリカ人はより多く働かねばならないと主張するとき、彼らは東部だけを見るのではなく、日本、そして韓国への特定の見解を示している。ほとんどの日本人労働者は六日労働の日程であり、そして半分は彼らの割り当てられた休暇を取っていない。韓国人は今尚四つの日曜日の内三日は工場に出勤している。製造業において、殆どの外国との競争が行われている部門では、日本人の労働者は合衆国における彼らの対応部分よりも各年に六週間多く働いている。しかし、合衆国の労働者は既に西ドイツの労働者よりも八週間多く働いているし、そしてスエーデンの労働者よりも十一時間多く働いている。西ヨーロッパ人は賃金を削減せず時間を削減して、彼らの標準生活を維持している。」(pp. 152-3)

そしてさらに彼女は次のように主張する。「労働時間の不一致は多くの場合彼らが合衆国が日本の方法を模写せねばならない事を十分に証明しているかのように引用されている。しかし、競争の経済学は模造品の経済学ではない。それはより複雑である。第一に、我々は何が要求されているのかについて明らかにしなければならない。もし現在の支払いでより多くの労働時間であるならば、労働者の賃金を減少させるための事業にとっての迂回的な方法である。より低い賃金は、短期的には競争力をたすけるけれども、長期的には、投資への誘因の減少、高い労働移動、そして従業員の勤労意欲の低下を通じて生産性の低下を導く賃金低下として帰ってくる。賃金を低めるゲームは潜行性であるに違いない。」(p. 153) そして、「我々は日本から、そして同様に我々自身の歴史から何を学ぶべきかは、賃金を減少させる、あるいは労働時間の延長の必要ではなく、生産性の重要性である。国際市場においては、長期に問題になるのは個人の労働が何時間かではなく彼乃至彼女がそれらにどのような生産性で働くかである。もしアメリカ人が日本よりも(比較し得る賃金で)より短い時間で同じコンピュータを生産できるならば、たとえアメリカの競争者が五十、或いは四十、あるいは三十時間労働週であっても、そのコンピュータは売れるであろう。そして能率的な生産それ自身は日本と韓国に現れたケースのように、賃金上昇をさせる事になる。国際的な競争において従業員の生活標準をさらに押し下げる代わりに、アメリカの経営者は彼らが購入する労働時間をより生産的にする事を目指すべきである。」(p. 153)

そして逆に日本の状態について次のように主張する。「株式会社アメリカの地位の皮肉は超過労働時間は日本における重大な問題であるという事である。彼らがそう呼

ばれているホワイト・カラー『サラリーマン』を考えてみよう。彼らは圧力がまの環境において 厳しい計画の 結びついている。彼らは困難な 定期通勤、 拡大された労働日、そして『仕事以後の』義務的な社交に直面している。彼らは彼らの休暇をとることを強く制限されている。最近においては、日本の活気に満ちた経済は常時高い事に近い超過労働時間になっている。その結果、数千の労働者が過労死あるいは『超過労働による死亡』の犠牲になっている。完全に健康でなければ、彼らは、通常長く延長された超過労働、あるいは特に高い緊張の仕事の後に、彼らの仕事場で突然倒れる。」(pp. 153-4)そしてまた次のように警告する。「最近の政府の研究は、日本の生産性は(その高い成長率にも拘らず)その労働時間があまりに長いことが一つの理由で、他の先進国のそれよりも低いという事を発見している。そして日本には労働時間を短縮する 相当な 圧力が かかっている。政府は国民的 目標を 1,800 時間にしているが、それがもし達成されれば、日本の労働時間は合衆国のそれ以下になるであろう。そして1985年の世論調査によれば、多くの若い日本の労働者は超過労働時間を嫌がっており、そして恐らく賃金の増加よりも労働時間の短縮を選ぶであろう。現在の日本の労働時間と競う事は全く馬鹿げている。アメリカに日本の仕事の文化を模倣させる事を要求する人々は、経済的成功の重点は良い生活を可能にすることであるということを忘れている。経済的成功の名前において生活の質を害する事は無謀きわまることである。」(p. 154)

そして、労働時間の短縮は生産性を上昇させるとして次のように主張する。「事実はいくつかの労働時間短縮の計画は現実に労働生産性を上昇させている。例えば、多くの人々は月曜日、すなわち週の第一日はより生産的である。二つの「月曜日」を創造することによって、ジョブ・シェアリングは生産性を上昇させた。しかし、最も驚くべき事は、一定の条件の下においては、より短い労働日は必然的に生産高を低下せしめるのではなく、それを高めさえするという証拠があるという事である。Kellogg Company が1930年12月1日に六時間労働日に歴史的な転換をした時に、彼らは不況の失業と取り組む戦略を追求していた。彼らがびっくりしたのは、彼らは、労働者が3パーセントから4パーセントより生産的になったという事を発見した。幾つかの部門ではその上昇度はより以上でさえあった。或観察者によれば、全体の小麦ビスケットの断片の八十三ケースが普通は(八時間労働日においては)一時間に包装されていた。私が訪問したときには、その数は96であった。労働者達は喜び、そしてより早

い速度とより短い労働時間を選んだ。そして経営者は同様に喜んだ。W. K. Kelloggによれば、「我々の従業員の能率と勤労意欲は〔原文のママ〕大変増加し、事故と保険は大変改善され、そして生産の単位コストは我々が以前に八時間に支払っていたのを六時間に対して支払って余裕が出来る位低くなった。」(pp. 154-5) それはなぜであろうか？彼女は次のように答える。「理由の一部は労働日が集約されるという事である。その夏の真ん中において、中世の労働日は日昇から日没まで広がっていた。しかしこのような長い期間の間に、多くの、延長された休憩が要求された。近代の労働日はより短いとその時間中により少ない休憩をとる。しかしそれらは、計画されていると（公式の休憩や食事の休憩のような）、あるいは計画されていない（冷たい水の回りに集まるような）不生産的な時間である。（p. 155）

しかし、このようにして、時間短縮と生産性の上昇が結びつくことを見て次のように彼女は説明する。「それらが雇用地代を低くする、そしてその意味において生産性を低くするが故に事業がより短い労働時間を好まないという事実と多くの現実の状況においては、より短い労働日はコストを高めないという私のここでの主張の間には矛盾があるように見える。しかた Kellogg, Medtronic, そして Ideal のようなところでの雇用地代に実際に発生したものを考えてみよう。それぞれの会社は支払いを減少させずに労働時間を減少させている。それ故に、時間当たりの賃金は上昇しており、それ故に初めの雇用地代は維持している。それが何故生産性が落ちなかったかの理由である。労働者が時間によって支払われている所の場合には、すなわち、会社が時間賃金を上昇させた所、そして変革が漸次であったところ（一日に一時間から二時間の順番で）の場合には、より短い労働日はそれ自身に対する支払いに示される。」(p. 156)

そしてまた次のようにも主張する。「変革はまた勤労意欲を改善する。労働者は会社がより少ない労働時間と賃金の上昇を計画した意図に感謝する。結果として、彼らは彼ら自身の時間でより多くの個人の仕事を実行し、そして仕事をより規則的にすることを示す。もし作業場の改革が正しく行われるならば、会社は費用無しでその従業員から忠誠心と生産性を獲得する。換言すれば、雇用地代／生産性の関係は上に移行する。」(p. 156)

そして最後に彼女は次のように説明する。「私の提案を実行した場合の幾つかは、利益の割当、休暇と育児休暇の保証、そして給料を取る労働者の労働時間の標準化

のような、短期的なコストがあるであろう。しかし他の事は超過労働時間に対する埋め合わせ時間の代替、或いは可能ならばより短い労働日のように、貨幣を節約する。将来の所得と交換する提案は最も悪くて、『コストに中立』である。——それは単に既に計画されている賃金増加の代わりに自由時間を要求する。——そしてそれ自身に部分的に支払われるであろう。(時間短縮の形態によって)。そうであっても、事業はアメリカは労働時間を少なくする余裕は出来ないと疑いもなく主張するであろう。——我々の歴史全体において労働時間を短縮するすべての提案に起こってくる反対である。この反対は前に克服された、そして再び現れるであろう。」(p. 157)

さらに重要なことは次の問題である。「経済的実行性はレジャーを獲得するための重要な条件である。それ故に、生産性の所得への自動的転換は打ち破られねばならない。しかし、超過労働の罟を逃げだした多くのアメリカ人にとってはまた、消費の踏み車を抜け出す事に努力するであろう。それは生活の方法と考え方の方法を変更することを要求する。その転換は経済的そして社会的だけではなくて、文化的そして心理学的である。」(p. 157)

「期待を変更し得る事は物質財が満たす心理学的そして文化的機能を理解する事に依存する。それらは主体性あるいは自尊心を創造する道への手段であるに違いない。そのものは我々の生活の空白を満たすであろう。彼らが熱望しているものが感情的構造——家——を担っているときには、多くの夫婦は家を所有し、あるいはその立派な家具で満たす事に熱中している。幾人かの婦人は、彼女らが意識的にか或いは無意識的に失ったものを補償する幻想を自分自身に創造するためにファッションに転ずる。物質主義は利他主義的な声でも有り得る。男子は彼らの妻あるいは子供に与えるために——『生活が提供する最良のもの』あるいは『私が持った事の無い』ものを用意するために——黄金の壺を追求する。しかしその過程において、すべての人は次のようにいってごまかしている。すなわち『私はいつも仕事で貨幣を儲ける正しい事をしていたと考える。しかし私は家にいない。』現実主義は多くの場合来るのがあまりに遅い。すなわち『今や私は老いてしまった。私は何かを失ったことを見る。』」(p. 158)

また彼女によれば次の問題も存在する。「幾人かの人々はレジャー時間へのアメリカ人の必要性について疑問を持っている。労働は悪いかも知れないが、しかし恐らくレジャーが代わるべきものとして推奨できるのかという事である。」(p. 159) 彼女によればこれは一つの問題が存在する。第一は人々は仕事をする事を好まないか、ある

いは好まないがするべきか。第二に、レジャー時間は評価もされないし、価値もない浪費時間であるということである。

ところが彼女によれば労働は押さえきれないということである。なぜか? 「何故多くの人々が第二の仕事をするのであろうか? 男子のゴム労働者は一日のブルー・カラーの標準賃金を支払われており、彼らの妻たちの多くは働いていた。彼らの純粹の経済的必要から労働しているのでは無い。私は彼らの行動は文化的強制によってより動かされている想像している。——靴工場における作業員、あるいは前に引用した機械工の同僚を駆り立てている同じ強制力。レジャーをする男子は怠惰であると言っている強制力である。」(p. 159)

しかし、この強制力は力を減じている。すなわち、「この文化的強制力はその強制力を減じているという兆候が今日存在している。恐らく最も重要なことは性別の役割の転化である。婦人は稼ぎをする責任を持ち始めた。そして男子は家を巡ってより家庭的になった。益々増加する父が親になることを欲するようになった。十八才から二十四才の間の男子の最近の世論調査において、半分近くが彼らは家に留まり子供を育てたいと言っている。『男子の犠牲』という精神は消えてきている。すなわち人口のだんだん減少する部分が、『本当の男子』である事は、禁欲を伴い、そして家族に衣食を供給する人であると信じている。」(p. 160) それ故に、彼女によれば伝統的な労働の倫理は根底で変化してきている。

そして、「人々は時間短縮をして働きたい。彼らはレジャー時間として公式に設計されている中でも、がんばって長く働くであろう。しかし、Akron の例が我々を惑わせる第二の支払いの探求である。アメリカ人は支払われない労働を必要としている、何故ならば彼ら自身のために要求する労働のためである。彼らは為されるであろうものの多くは、既婚の婦人がフル・タイムの家庭婦人である時の日々の定まった労働である。そして、それは多くは面倒をみる労働である。——すなわち子供の面倒を見る、病気の親戚や友人の面倒を見る、家の面倒をみることである。」(p. 160)

それ故に、「自由時間を満たす支払いの無い労働——家庭において、そして共同体において——は、個人として、そして社会として、我々を生き生きとさせる。——その減少に伴って生まれる社会問題から明確にするべきであると言う事である。それでも尚、もし我々がそれが仕事と共に再び満たされるためだけであるとするならば、闘いは半分だけ勝利したことになる。そこにはより多くの真実のレジャーのための圧

縮されたニーズがある。」(p. 161)

しかし同時に、「問題は自由時間を使う物理的能力を超えて前進する、レジャー時間を使う能力は、『自然の』能力ではないが、しかし開発されねばならないという言う事も真実である。」(p. 161) それ故に、「レジャー時間を増加させることに伴う潜在的な問題は何であれ、私はそれらが打ち勝ち難いものであるとは考えない。労働時間における相当な削減はそれ自身によって困難の幾つかを緩和する。そしてもし我々がレジャー時間の価値を高める積極的な前進を行うならば、我々は報われるであろう」(p. 162) と Schor は主張する。

「レジャーは大きな魅力を持っているけれども、次の世紀はそれを我々により多くもたらすという確信を持つ事は難しい。将来は労働と消費の国民の歴史物語における他の話題を持つことは可能である。(p. 163) 勿論、幾人かの観察者は労働、ロボット、コンピュータ、そしてマイクロ電子技術が人間労働に取って代わる時に、消えて行くであろうと信じ続けている。他の人々はよりレジャーのより皮肉な側面を見ている。そこでは残っている僅かな労働は人口の一部によって独占される。社会は二つの大きな階級に分裂するであろう。——仕事(そして所得)を持つ階級とそれらを持たない階級である。既に上昇している経済的不平等性が開始される。」(pp. 162-3)

しかし、彼女は次のように主張する。「私はよりレジャーの社会になるための多くの年代記を綴ってきた。会社は最も重要な障害であるに留まっている。ほとんどは私の考え方にやかましい反対者である。最近の数字は、Conference Board は国民的基礎をもつ五十の企業よりも少数の企業が労働と家族の問題に対する包括的計画を持っていることを明らかにしている。しかし、常に啓発された、将来を見据えた会社は存在していない。……革新的な会社の数は尚少ないけれども、それは成長しつつある。そして表面的には個人に関連した時間に対する認識は、同様に増加している。最近数年間に、少なくとも幾つかの会社の経営者は彼らの従業員の生活の現実を目撃めつつある。」(p. 163) また「変革の為に必要に付いての公衆の認識が成長してきている。このような調査が体系的に行われて以来初めて、アメリカ人の多数が、彼らはより多くの家族とのそして個人的時間を得るために、現在の所得をさし止める意思があることを報告している。」(p. 164) そして、Schor はレジャーへの道を選択しようと呼びかける。

この書物はいくつかの「補論」あるけれども、それらは本文の主張を裏付ける統計的処理法の説明であるので、割愛する。

VII 紹介を終わるに当たって

以上かなり忠実に Schor の主張を追ってきた。我々はアメリカの労働時間の短いことを戦後信じてきたのであるが、それが日本と同様、あるいはそれよりも長いということとは驚くべきことである。しかし、ムーンライト・レイバーの存在や人種的差別の問題を考えれば、これはあり得ることである。筆者は彼女の鋭い分析に敬意を表したい。

本書における労働時間の分析が資本主義の生成発展、そして資本の蓄積過程と結びついて分析されていることは優れた特徴である。この問題を資本の蓄積過程との関連で解こうとする分析手法は多くの学ぶべき点があると考ええる。

特に、時間短縮を実現し、レジャー時間の重要性を生産性と結びつけ、また国際的な競争力と結びつけている経済学的手法は日本における、労働時間短縮の運動に大きな示唆を与えるものであると考えられる。そして、そこでの政府の役割や企業に対する統制の問題を我々は日本問題と結びつけて考えるべきであることを述べてこの紹介を終わりたい。

(付記) 本書評の校正中に本書の翻訳書が出版された。それは次の通りである。

ジュリエット・ショア著、森岡孝二他訳

『働きすぎのアメリカ人』窓社刊

本書が日本の「過労死」や「長時間労働」解決の前進に役立つことを祈る。